

---

# Ampere Blood

真中すぺあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A m p e r e B l o o d

### 【Nコード】

N 8 8 0 1 Y

### 【作者名】

真中すぺあ

### 【あらすじ】

最新のVRMMORPGに人々は閉じ込められた。危険と悪意に満ちた世界で槍の男はひとりの少女を助ける。男はただのプレイヤーではない。彼は任務を受け、人を導く者。そうとも知らずに少女は男の手を取る。そして、冒険が始まる。

ちりーん。

小さな鐘の音が響く。全体アナウンスを告げるその音は本来、サーバーの不具合や停電後に予備電源に切り替わったときのために用意されたものだ。緊急でなければ使われない。

オープン テスト開始からちょうど十二時間が経過していた。

強制的に半透明の四角い窓がプレイヤーたちの前に出現する。メル画面だ。

Sub: 【<天地創造>のご案内】  
from: Noname

人の子よ 汝、試練を受けよ

七日七夜を経て世界は創られた

そして今より七日七夜の後、世界は生まれ変わる

昼と夜を創ろう

空と大地を創ろう

太陽と月を創ろう

魚と鳥を創ろう

獣と家畜と、そして人を創ろう

再び世界は生まれる

万象が完成せしとき、更なる試練を与えよう

人の子よ 汝、神の敵を討ち滅ぼせ

機能 ログアウト が消失しました。

《ジェネシスGenesisワールドWorld》はVRMMORPGだ。

VRMMORPGとは仮想現実多人数同時参加型ロールプレイングゲームというなんとも長つたらしいものの略語であり、その省略される前の単語の羅列を噛まずに発音できる者は少ない。

その歴史は二十一世紀初頭のネットゲーム、いや、家庭用ゲーム機が普及したさらに数十年前から語るのが筋かもしれないが、ここはVRつまりは仮想現実を利用したゲームとしての始まりから説明させて貰おう。

今から十五年前に初めてゲームセンターに設置された。場所はあの自由の国だ。ものは米軍で使われた戦闘訓練用の本物。もちろんもともとはゲームとして開発されたわけではない。それをひっきりなしに戦闘機の飛びかう基地の陽気な軍人たちが持ち前の自由さを発揮し、近くの子供に遊ばせるために持ち出した。

このあたりは非常に嘘くさいので情報の攪乱がなされている可能性がある。重要なことではないから気にする必要はない。

仮想現実、つまりはコンピュータによって擬似的に精神を仮想の肉体に当てはめ仮想の世界への旅行ができるもの、程度の認識で問題ない。

当時のそれは型落ちではあるが吐き気を催すくらい臨場感のある銃撃戦の楽しめるシロモノだった。日本でいう教育団体的なものか

ら批判を受けて撤去されるまで某国全土からゲーマーやらミリタリーマニアやらが集結して良い意味でも悪い意味でも賑わった。

その技術が日本の企業に渡るまで五ヶ月。ゲームセンターにマイルドになったそれが置かれるまで三年。ファンタジーテイストに味付けされて家庭用として発売されたのが六年後の話。

第一世代VRMMOが発売されたのは七年前。携帯端末を含めたひとりあたりのネット接続可能デバイスの所持率が2.0台を超えた日本という国にあっても予想より出遅れる形となった。

膨大な情報量进行处理するサーバーが必要だったためだ。加えて、各社が競って家庭用のマシンが開発するにあたるのと同時に規格の統一がなされたのも原因のひとつだった。

第一世代VRMMOは飛ぶように売れた。やはり、ゲーム内でコミュニケーションが取れるというのは大きいのだろう。危惧されていた安全性の問題も大きなものはなく、全ては順調に進んでいた。ユーザーは加速度的に増加。

しかし、そこで満足しないのが人間だ。たとえばVRマシンにおいて視覚は秒間を六十のフレームに区切り、一コマ一コマをパラパラ漫画のように描写するという手法を取っていた。

これはかつてのゲームやアニメーションなどと同じである。3Dのモデリングによる空間と事物を最先端のコンピュータで構成し、それをVRマシンへと転送することによってはじめて精神とデータが相互干渉を行う仮想世界が誕生する。

それを更に細かくしようという計画が持ち上がったのだ。が、どんなものにも問題はつきものだ。

かつて、ロボット工学の分野で 不気味の谷 と呼ばれる問題があった。

人間を模したロボットはあるところまで人間に近づけると不完全な動作や感情表現が人間に嫌悪感を与えてしまうというのだ。人間そのままの動きをなんとかコピーしても無機物特有の不気味さを実際立たせるだけだった。今でこそ解決しているが、当初は多くの研究者の頭を悩ませた。

仮想現実でもそれほど酷いものではないが同種の問題が起こっていた。些細な違いが、ないと意識しているはずの差異があることが仮想現実酔いを引き起こす。

たとえば、視覚にしてもバーチャルリアリティでなければ気にならない程度の滑らかさだが、人間の認識は誤魔化し切れない。微かな差異は返って違和感を生む。

そこで、VRマシンをより完全なものにするために六十の枠を更に六十に分けることが決定された。ただし、これはモンスターとプレイヤーにのみ適応され、他の要素は全て従来の六十フレーム描写だ。

そして、他の五感も同じように強化、改善された。特に味覚は第一世代のVRゲームには存在しなかったものだ。試運転の結果ではVR酔いも第一世代よりは少なくなっていた。

結果、ソフトの性能がハードを上回り、初期の家庭用VRマシンではプレイできなくなる。それが第一世代と第二世代の分水嶺となった。

そして、彼らの存在する《Genesis World》こそ本邦初の第二世代VRMMORPGである。

クライに最初の任が下ったのはそれから五日後のことだった。

颯爽と漆黒の外套をなびかせ、風を切って歩く。短く逆だった黒髪は視界を妨げず、小さく揺れた。日本人としては平均よりわずかに高く設定された身長であるが、得物はそれよりもずっと長い。

やっと新しい武器と生活に慣れ、ウォリアーのレベルも21になっていた。

ウォリアーは近接攻撃武器の攻撃力を上昇させ、スタミナ値の回復力を上げる。同じ近接職であるナイトやブシドーに比べ癖が少なく、ひとりでも狩りのしやすい職業だ。

彼はひたすら淡々と魔物を狩り続けていた。槍の基本スキルである槍術は成長率が最低ながらも熟練度GからEまで上がったのを始め、転職時に手に入れたスキルは着々と成長を続けている。

店には先客がいた。

白いマントに十字の切れ込みの入ったバケツ兜を抱えた大男だ。丁度工房から出てくるところでクライと鉢合わせになった。堀の深い西洋人じみた顔立ちで金のオールバックと口髭は綺麗に整えている。壮年の紳士をイメージしたデザインだ。

その手には巨体にふさわしい大きな鉄槌を軽々と持ち上げていた。彼の手首にはそのクラスを表すように十字架がぶら下がっていた。

「やあ、クライ。久しいね。仕事かい？」

名をヴァレンチノといい、鎚を得物とする不信心な プリーストだ。

「そつだ。あんたもか」

「うむ、結果的にそうなった」

「なんだ。面倒事でも押し付けられたか？」

「そんなところだ。が、吾輩が来た一番の理由はこれの修理さ」

軽く大槌を振ってみせた。光の粒が舞った。光の精霊の加護を受けている証だ。序盤にしては質のいい金属でできている。攻撃力は高いが、その分重い。まともに扱うには筋力値がかなり必要になるだろう。どうやらヴァレンチノのレベルはクライより高いらしい。

プリースト の筋力値ボーナスは低い。そのくせ物理攻撃適性のある武器が重さを攻撃力とする鎚しかない。かつての聖職者がメイスを武器にしていたことからの引用だが、相性はいいとはいえない。

しかし、鍛えようと思つて鍛えれば重装備での運用も可能だ。素早い敵でも優れた技量を有する彼ならば容易に対処できる。更に高い魔法防御力と魔法による回復能力もあるためにそこらの ナイト よりずっと優秀な守り手となるだろう。

「いい武器だな」

「だろう？ ノイ殿はいつだって良い仕事をする。頼もしい限りさ」

豪快に笑い、クライの肩を叩くと街中へと消えていった。彼もクライと同じように呼び出しがあるまではひとり狩りを行なっている。

店の中ではノイが作った武具を集め、露天の準備に勤しんでいた。これまで彼女は毎日すべての武器を持ち出す。出来の善し悪しは問



わない。

机の上にも鉄製のダガーが山のように折り重なっていた。

「すぐ終わりそうか？」

「クライかい。ちよっと待ってな」

「いや、手伝おう。カードにはしないのか」

《Genesis World》の全アイテムは意志ひとつでカードへと形状を変化させることができる。所有者でなければできない。

「まだ値段を決めかねていてね。これだけ量があるからどうしたもんかと思つてさ。薄利多売でも何とかなるかね？」

言つ通りすごい量だ。どこからこんなに多くの金属素材が手に入ったのか。剣や鎧よりは使う金属の量が少ない槍でも山ができるとなれば相当なものだ。

クライは否定の意味で首を振つた。

「十本売ればいい方だ。人口を考えると」

オープンの参加者はおよそ一万五千人。ログアウトができなくなる前に抜けた人間を引けば一万人強。これに彼らが加わつてもせいぜい一万二千人ほどがこの世界にいる計算だ。

しかも魔法や弓という攻撃手段もある。物理攻撃武器を必要とするプレイヤーは半分にも満たない。

「そうだねえ。けどあんたみたいに拘りを持っているのがいるかもしれない。そいつのためにもいろんな種類を置いておくことにも意味はあるのさ。売れなくてもね」

「そんな奴がいればオーダーメイドする。最初からこの中の出来のいいものだけを選んで持っていくつもりだったのだろう」

にべもなく言い返す。

「ま、そうかもね。座りな。お茶も菓子もないけどね」

「ならば俺が出そう」

カードの中から濃い赤色の紅茶と干した果実の練りこまれたパンを取り出した。

後者はコモンスキルの簡易料理 で作ったものだ。このスキルは街の外でも使えるためにパーティにひとりは持っていると言っていると役立つ。街内専用のスキルと比べれば作れる品数や味は落ちるが旅の供には十分だ。

「よくもまあこんなものを持ってるね」

「紅茶はクエスト報酬だ。こっちは小麦粉を買ってきて作ったがな。長く街を離れるならこういう保存の効くものもいい」

この 世界 にも賞味期限は存在する。生の果実なら三日、肉や魚は二十四時間といった風にもものによって様々だ。

パンは中でも安価で日持ちするもののひとつとなるものはずだった。そのはずなのに熱心な冒険者たちのおかげで需要は拡大。値段は二倍近くまで跳ね上がっていた。

「なるほどねえ。無駄なスキルも入れてみるものだね」

「……任務の話だ」

「ああ、そうだったかい。そっぴやそんなこともあったねえ」

一呼吸置いてノイの手の白く固まった関節が動いた。カードが変

化し、一枚の地図を差し出される。紙というより、極端に薄いホワイトボードのようだ。固く、光沢がある。

本来はゲーム内のお絵かきを楽しむためのアイテムだが、ログアウトして攻略サイトでダンジョンマップが確認できないためにこの形での地図が流行している。

それでも一度訪れたダンジョンはキャラクターデータに保管され、情報バーから確認できるので比較的安価で値段で取引されている。逆にフィールドマップはNPCが販売しており、それを買うだけで情報が更新される。

「これは アルラウネの森 か」

「そう。今回のあなたの対象者はここで狩りを行なっているらしいよ」

アルラウネの森は中級者への登竜門として設定されたダンジョンだ。そこそこのレベルでパーティの連携とクラスの特徴を活かして初めてクリアできる程度の難易度で、多くのプレイヤーがつまづく場所でもあった。最初のクリア報告があったのもつい昨日のことだ。

「まさかここにソロで？」

「そうだよ。だからあなたに話が回ってきたのさ」

「死ぬぞ」

クライはあたかも人間のように顔をしかめて言った。ノイの方は他人ごとと割りきって紅茶に口をつけている。

「死んでも食らいつきたい何かがあるってことだろう。やっつけてくれるね」

「どうなるかわからん。ターゲットのクラスは？」

「サモナー。上等な召喚獣を手に入れたんだと」

異界から魔物や天使、悪魔などを呼び出すことができるクラスだ。テイマーの扱う魔物より強力だが、召喚している間はずっとMPを消費し続ける。燃費が悪く、召喚獣のスキルカードが手に入りにくい。

それ自体はアイテムカードと同じ扱いであり、サモナー以外にもシノビやウィザードも短時間なら召喚できるので市場に出回りにくい。

「ならば、急いだよがいいな。下手をすれば無闇にプレイヤー間の対立を生んでしまう」

「そうだね。ついでにボスモンスターから素材も採ってきておくれ。あんたの槍を作り直してあげるから」

「無茶を言う。あそこは六人で行くところだ。その上足手まといがいてはどのにもならん」

「でも、欲しいんだらう？」

腰のカードボックスに目を落とした。ここ数日で物足りなさを感じているのは間違いない。今の槍では限界もそう遠くはないだろう。何より上がった基礎能力を持て余すことになる。ヴァレンチノとの差も開くばかりだ。

次にじつと山となった武器を見た。ノイのレベルも着々と上がっていることが確認できる。

「やれるだけはやってはみる、か」

そう言い残して、テーブルの上のパンをそのままにクライは工房を出る。

黒い背中を見送ったノイはどうなるかねえ、とナイフを手に取り  
呟いた。

ときは一日前に遡る。

一組のパーティが深緑の真つ只中で戦闘を行っていた。

馴れ初めは行きずりのようなもので互いについて知り合ったのはあのログアウトを禁じられた日のことだ。うちの三人は最初のチュートリアルクエストで共にパーティを組んでいた。そこに宿を同じくしたふたりが加わり、最後にひとりでふらりと歩いていた彼女が加わった。

パーティとは戦闘において扱われる個人のひとつ上位の単位だ。最大六名のプレイヤーから構成されるそれはプレイヤー間の経験値の均等な配分や戦闘時のダメージを与えずともHPバーが表示されるなどのメリットがある。

しかし、それはただのルールに過ぎない。パーティの一番の利点は六名のプレイヤーがいがみ合うことなしに協力できるという点にある。単純に六人が力を合わせるだけでも強力ではあるが、プレイヤー同士の連携は時として一回り格上の魔物すら凌駕する。

この未曾有の危機に対し、ひとりでも多くの仲間を得ることは定石であった。更に彼らは行く行くは力をつけた大型ギルドに入るつもりだ。

そうすればアイテムのやり取りや情報の収集が楽になる。何より彼女らのパーティは他よりも弱かった。レベルではなく、技量や連携などのプレイヤー依存の能力が、だ。ひとつかふたつ下のレベル

帯の敵すら余裕を持って倒せない。

また、それを補う知恵もない。敵が強くなるにつれ、弱点が露見するようになっていた。ギルドに入ればメンバーを調整できる、そうなればもつと楽に戦える、と半分のメンバーは考えていた。

彼ら相對するのは赤毛の熊。歪に発達した長く太い腕には人ひとりを容易に串刺しにしうる破壊力を持つ。

四人の男女を守るように重厚な鎧で覆われたふたりが立ち塞がる。そのすぐ足元では尻尾が二股に別れた白猫が毛を逆立てていた。後衛にいる少女が召喚したものだ。

彼女は濃紺の髪の毛の片側を肩まで伸ばし、反対側は耳から首に沿ったなめらかなラインを描いて切り揃えられている。瞳は澄んだ青に着色され、半月のように上まぶたが覆いかぶさっていた。眠いわけではない。生まれつきの癖だ。

装備は初級冒険者用の白地に浅葱色のラインの入ったローブをまとい、MP上昇の青いイヤリングが髪のかかっている左耳にきらめいていた。

熊は腕を大きく振りかぶると風のうねりとも遠吠えともつかぬ爆音と共に衝撃を繰り返した。前衛のひとりがかイトシールドを構えた。横殴りに現れた暴力はその守りすら破って、彼を吹き飛ばす。

攻撃後の隙について攻撃魔法の使い手である ウィザード が杖の先からスキルを繰り返す。飛礫が出現し、熊へと向かう。魔法の矢 から派生する最も低級な属性魔法スキルだ。胸のあたりでそれは弾けた。獣はもろに受けたというのにHPバーは視認できるほどの減少はない。

「やはり地属性では効果が薄いか！」

魔術士が齒噛みする。

更に後ろから アーチャー の矢と僧衣を身につけた プリースト の光魔法が飛ぶ。猫の主である彼女もそれに合わせて大型犬ほどの大きさを持つクロスボウを構えた。

熊は両手を十字に合わせ、三連撃から身を守った。

獣の動きは巨体の割に素早い。地を鳴らし、前衛の片方である シーフ に突撃する。剣で対応しようとするも圧倒的に重さが足りない。鉄のような腕と一度打ち合っただけで彼女も地面を転がった。

「お願い、デユオ！」

猫が跳んだ。

主の二倍はあろうかという高さの熊の頭へ一直線に辿りつく。首をくるりと回り、付け根辺りに噛み付いた。熊は咆哮し、体を振るが猫はしぶとくしがみついている。わずかにではあるが着実にHPが減少していく。

「今だ！ 全力でかかれ！」

ウイザード の声に従って、立ち上がった前衛のふたりが剣と鎌を薙いだ。いくつもの魔法と矢が乱れ飛ぶ。彼女も不相应に大きな弓を使って矢を放った。

その猛攻に耐えかね、熊が叫び啼く。猫はついに振り落とされ、光となって消えてしまう。体力がきたわけではない。 サモナー、つまりは召喚魔術士である彼女が先に音を上げたからだ。彼女のMPはもうほとんど残っていなかった。



ついに熊が倒れる。最後の―撃を下した アーチャー の女がドロップしたマテリアルカードを片手にウインクして見せた。

「お疲れ様、みんな」

「ああ、しかし、冷や冷やさせられたな。前衛が脆すぎるぞ。俺たちのところまで攻撃が届くかと思った」

ウィザード が言った。

「しょうがないわ。私も前衛は慣れてないから」

これは鉄の胸当てを付け、革の兜を被った シーフ だ。彼女は中距離で仲間の援護を担当するはずだったが、このパーティではスローイングナイフを片手剣に持ち替えている。

「そもそもふたりってのもなあ。もうひとりいればなんとかかなりそうなもんだが」

「一発でのされてた癖に」

プリースト の男が言うと重装甲の ナイト は真っ赤になつて反論した。しかし、事実ではあるので誰もが冷めた目で見ていた。

「その点ミアのアシストは良かった。ネコマタがいなければどうなっていたことが」

ナイト 以外が頷いた。ミアと呼ばれた サモナー の少女が俯く。

「しかし、戦力の増強は必須だ。このダンジョンを今の戦力で進むにはリスクが高すぎる」

と、アーチャーが言う。これにも賛成多数。アルラウネの森を使うことには皆の意見は一致していた。これより低レベルの狩場は似たようなレベル帯のプレイヤーで溢れている。

「ま、ストロングアームベアからのレアマテリアルがドロップしたんだ。これでいいものを買えば少しは楽になるさ」

「お、熊の腕に爪まである。俺の鎧新調してくれよ」

「一発でふっ飛ばされなくなったらね。吹っ飛ばなら今の軽いヤツの方が後衛の私らは安全だ」

アーチャーの揶揄にナイト以外が笑った。ナイトはひとり面白くなさそうに盾をいじっていた。

カナンの街は広い。

有名な比喩のひとつでいうなれば東京のある某ドームが十数個分。千葉にある東京と名のついたテーマパークに匹敵する大きさだ。転移パネルなしには気軽に買い物を楽しむこともできない。

昼間はNPCの往来もあり、賑わっているように見える。プレイヤーたちは心が見えないところに置いてきた不安を忘れたようにゲームに集中していた。

生産職はアイテムを作り、戦闘職は進んで狩りに勤しんでいる。これも新しい発見とステータスの向上により前に進んでいるように感じられるおかげだ。

彼女らのパーティは南の職人プレイヤーでひしめく露店街を冷やかしつつ、マテリアルカードを売り払った。森まで行くプレイヤーはなかなか少ないようでたった数時間の戦闘にも関わらずここ数日で一番の稼ぎだと シーフ がはしゃぐ。

「とりあえず、急いで欲しいものがないなら六等分しようと思うが異存はあるか」

と、 ウィザード が尋ねる。彼らは初めてのダンジョンだったので前回の買い物で回復アイテムを買い込んでいた。早めに切り上げたおかげでまだ数には余裕がある。補充する必要はなかった。

不満の声は彼の予定通りひとつしか上がらなかったので皆が等しく懐を温めた。

「ちえつ、俺の装備だって結構金かかるんだぜ」

「それを言うなら私だって。この剣も高レベル金属なのよ」

「仲がいいのは結構だが、うん、まあいい。一旦解散しよう。昼飯が済んだら西のゲート前に集合だ」

「それじゃあ一時くらいかな」

アーチャー が尋ねた。

「そんなところだろう。各自英気を養っておいてくれ」

ナイト と シーフ が言い争いながら去り、アーチャーが プリースト を引っ張るようにして露店街へ戻っていった。その場にはリーダーである ウィザード と サモナー のミアが残った。

「ミアはどこに行くんだ？」

「召喚術師の館……です」

「じゃあ俺も行く。俺も新しいスキルを見ておきたいと思っただんだ」

小さな歩幅で歩き出したミアに ウィザード が合わせて歩きます。彼女の表情は変わらない。

「そっいえば君はいつも弓を使っているよな。 サモナー は魔法タイプが主流だと思ったが」

正確には洋弓銃、クロスボウだ。クロスボウは武器のダメージ係数以外に固定ダメージの補助が入る。基礎能力が低くてもそれなりの火力が保証されているということだ。

「魔法を使うと召喚獣にMPを割けなくなりますから」

他にも理由はあるがミアはこれで男が納得するだろうと思っっている。もつと付け加えても良かったが、正直疲れるので御免被りたい。

サモナー の基礎能力は平均的だ。多少魔力値が抜きん出ているが、他の魔法職には及ばない。特化しているわけでもないのが戦い方によつては無駄が出るが、その分多様な 型 を選ぶことが出来た。それはまだ情報が少ないがための試行段階であることの影響もある。誰にも何が正解かわからないのだ。

そんな中ミアは魔法は補助として割り切り、 サモナー の サモナー たる所以である召喚獣に力を注いでいる。しかし、それだけでは戦闘中に彼女は棒立ちになってしまう。

そこでわずかでもダメージを与えるべく古めかしいハンドルのクロスボウを携帯している。アーチャー のように専用のスキル

は使えないが召喚獣と合わせれば後衛ひとり分の攻撃力は十二分にある。どうせ攻撃魔法を使っても ウィザード のように上級魔法は使えないのだ。

「そうか。いろいろ考えているんだな。じゃあ、また召喚獣の強化か？」

「まだ、決めてません。……多分そうですけど」

「なければコモンスキルで何か探すのもいいかもしれないな。精霊魔法なら回復できるものもある。プリースト ひとりでは手が回らないこともあるだろう。俺の属性も水であればそうしたかったのだがな」

「……高いので」

「それもそうか。そのうち余裕が出れば考えてみてくれ」

とぼとぼと歩くふたりの目に赤い魔方陣の絵描かれた看板が見えた。中に入るとクラスマスターと売り子がカウンターに座っている。どちらもNPCだ。クラスマスターは何故か胡散臭い中国人のような喋り方と外見をしている。

ミアはまず新しい職業クエストが発生しているか調べるために糸目でナマズのようなひげを伸ばしているクラスマスターに話しかけた。

「あの、すみません」

クラスマスターが妙に大袈裟な動作で手を広げた。

「こんにちは。何かな？」

妙に人間らしい仕草だ。彼らNPCにも多少のAIが搭載されていることはVRゲームの常識であるためにふたりは気にしない。

「私が受けられるクエストはありませんか？」

「ふうむ、適正は……なるほど、ビースト」

彼のいう適性とは魔物との相性のことだ。これは隠しパラメータとなっているためわかりにくい。

通常モンスターをペットにするには相性の合うタイプのものしか不可能だ。サモナーの召喚はその限りではないが相性が良ければ少しくらいならレベルが足りなくても強力な魔物に言うことを聞かせることができたり、能力が上がったりする。

「なら、ひとつだけ。ここにいる私が依頼することはきつとこれつきりになる。この魔物を使えるようになれ。これがクエストそのものであり報酬だ」

クラスマスターが服の袖に手を突っ込み、一枚のカードを取り出した。

「きつと君はこの先多くの困難へと立ち向かわなければならぬだろう。召喚術士はそれを魔物を操ることで乗り越えねばならない。このモンスターが君の助けになるかはわからない。壁となることもあるだろう。ビーストの適性を持つ サモナー は少ない。君のような少女に頼むのは酷であるが、次がいつになるかはわからないな」

ミアがカードを受け取る。召喚獣のようだ。幻獣の証である狼の頭が表面に描かれている。その下には青い丸があり、その中の数字は使役に必要なレベルだ。ぴこんと電子音がひとつ鳴ってクエストが始まった。

「一体何の冗談ですか、これ……」

ミアのレベルは18。そのカードには90の数字が銀色に光っていた。

「つーことは何か。ミアはめちゃくちゃ強くなってってことか？」

ナイト が苦虫を噛み潰したような顔で訊いた。

「だな。 サモナー はレベルが足りなくてもMPのある限り召喚できる。ヘルプによると 使役できない らしいが、敵を殲滅するには問題ないだろう」

ウィザード は自分の手柄のように答えた。

対照的にミアの口からはため息が溢れる。召喚士の館を出たときに新しい召喚獣のことは黙っておいて欲しいと告げてあった。彼が嬉しそうにうんうん、と頷いていたから不安だったが、その予感は的中していた。

彼女のパーティはすでに街を出て森にいる。皆新しい装備やスキルを試したくてうずうずしていたが、ウィザード の暴露によって興味はそっちに向かっていた。

「じゃあ、早速試してみようじゃないか」

アーチャー が急かす。

「いえ……その、やめた方が」  
「何か問題あるの？」

ミアはそんな高レベルの魔物を召喚したことはない。使役できない ということがどれだけの枷になるか全くわかっていない。



「どうなるかわかりません。みなさんが襲われるかもしれませんよ」  
「それもそうだな。じゃあ、離れて見ているから思う存分やっつけてくれ」

プリースト がにやりと笑う。

ナイト 以外は乗り気なため、ミアは次の魔物とのエンカウトで単身突撃し、それを召喚することになった。

「レベル90か。どんな姿なんだろうね」

「このあたりの敵なんて一撃だろうな」

「そりゃそうよ。それどころか中盤までなら瞬殺だわ」

彼女を除いたパーティメンバーは大いに盛り上がった。

ふと音がしたのを聞きつけ、アーチャー が矢を放った。

森の茂みからこちらに気づいた魔物がのっそりと現れる。前に戦った赤毛の熊と木の化物が二匹だ。後者は状態異常系の魔法を使う。正面から戦えば プリースト が嫌な顔をして頭を掻くであろう。

「それじゃあ頼むぜ」

皆が少し離れた木の影に隠れたのを確認し、彼女はカードを天に向ける。

「……それじゃあ、行きますか。あなたに エネア の名を贈ります。私に力を貸してください」

巨大なヘキサグラムが中空に描かれ、回転し、時空を歪ませる。中央から黒い穴が出現する。穴は広がり、周辺の空を覆い隠した。

ぴりぴりと何かが肌を刺す。

鼻が出る。口が出る。次に目が出たとき、彼女は自身の体の力を失った。がくと膝をつき、地面へと沈んだ。吐きそうだった。

確かにこいつはレベルが高けえ。シーフ はたつた召喚するだけのことで既に及び腰だ。これまで見たどんな魔物よりも美しく力強い。それは第二世代VRマシンの性能のおかげだけではないだろう。

月のように大きな丸い目が周囲をぐるりと見渡す。鼻から真っ黒な息が漏れている。口元から地鳴りに等しい唸りが響く。ぎろりとその目が他のパーティーメンバーを捉えた。

逃げて、と言ったはずの口からは何の音も出ない。ただ体の力が抜ける感覚がするばかり。もう頬は冷たい地面と合わさっている。

幻獣が穴を抜けて音もなく地面へと降り立った。黄金の獣だ。全長は大きな家ほどもある。ミアの目からはその全貌は見えない。ただそこにあるだけで周囲の温度が下がったのではと錯覚する。

凶暴な吠え声が聞こえ、木の魔物は引き裂かれた。熊の半身が壊れた玩具のように宙に舞った。獣は振り返る。

ミアと目が合う。戦慄した。自分の召喚したはずのそれは殺意に溢れている。なるべく慎重に、と冒険してきた彼女にとって初めての死の予感だ。

獣の前足が彼女に迫る。足の太さに対し細い爪であるが、鈍い銀色に光り鋭利だ。思わず、目を瞑る。

しかし、いつまで経っても衝撃は来ない。

再び目を開けると獣の腹が彼女の上にあった。つまり、召喚獣はレベルが高くて術者に対しては攻撃しない。

だが、彼女の後ろには何がある？

爆発するような音が聞こえ、木片が彼女の背に直撃した。悲鳴と怒号、そして死のメッセージ。

突如、幻獣が光となった。殺意は消え去り、森に静寂が戻る。

彼女のMPは底をついていた。たった二十秒にも満たない間の出来事だった。

力の入らない体を気力で支え、ミアは立ち上がる。メンバーを探そうと振り向けば一面が抉られたようなクレーターが出来ていた。少し時間を置けばマップの修復機能が働いて元に戻るが、なんとも悲惨な光景だ。

「生きてますか」

「なんとかね……」

茂みから ウィザード を含む三人が現れた。他のふたりは、と情報バーを確認すると街に転移させられていた。HPが尽きて復活したということだ。

しばらく、何も出来ずに呆然としていた。

ミアは魔力枯渇の状態異常に陥っている。しばらくは召喚も魔法も使えない。クロスボウは使えるかもしれないが頭がくらくらして狙いは定まらないだろう。そういう意味では何もできないに等しい。

「街に戻ろう」

沈痛な表情で ウィザード が言った。

カフェの六人テーブルに腰掛けたが、誰も口を開かない。武器をいじったり、カードを眺めたりするばかりだ。六人のうちの半分は飲み物にも手をつけていない。

ミアは謝ったものの、他のメンバーが複雑な気持ちを抱えているのが手に取るようにわかった。

「なあ」

ナイト だ。

「もう止めようぜ。わかってるんだろ」

皆が顔を上げた。ミアはすっと目を細めた。

「もう俺は、少なくとも俺はミアとは組めない」

「どういふことだ」

「怖いからよ」

ウィザード の怒気を含んだ問いかけに シーフ が答える。

「もし危なくなったらMPを回復してさっきのを召喚すればこの子は助かる。ボス戦だったらドロップの独り占めもできるわ」

「それだけのためにパーティを危険に巻き込むわけないだろっ！」

「この状況じゃアイテムは結構重いよ。デスペナルティも馬鹿にならない」

ミアの目が細められた。黙って事の推移を見守っている。すでに強さこそが権力になりつつある。もっとも原始的な法だ。ギルドを持つならば数を持って対応できるであろうが、彼女たちはまだ放浪の身。自分で自分を守らなければならぬ。

「極めつけがああメールだ。二日後どうなるかっていう噂は皆聞いたことがあるよな？」

その言葉に皆が体を震わせる。

仮想と現実が『死』という要素によってリンクされるといふ噂がここ数日で静かな波のように広まっていた。根も葉もない話ではあったが、衝撃的であるだけに話の種になりやすい。しかも前例があるとなれば。

「あれは冗談の類だろうか？」

「笑話で有って欲しいけど、ここは魔法の国。嘘だって本当に変わる。そのときが来なければ誰にも否定はできない。過去に同じ事を行った例もある」

「閉鎖空間での殺人ゲームなんて小説では在り来たりだな。俺も信じたくはないが、これの目的が娯楽であればそうなる可能性はある。外側での解決はどうも期待できそうにないしな」

本来であれば彼女らの体と脳は厳重に守られているはずだった。

しかし、仮想を極限までリアルにしたときに死の痛みと恐怖によってショック死する可能性は古くから指摘されている。にもかかわらず、一度も実現したことはないのは高度な安全プロテクトがかかっているからだ。

もし、プロテクトが意図的に解除されれば一体どうなるだろう。そうでなくても脳に直接データを読み込むVRマシンの仕組みがあれば脳に大量のデータを送り込み焼き切ることなど造作もない。

今、プリーストは二日後の試練こそ死のはじまりだと遠まわしに指摘している。現にログアウトが不可能になっているのだから笑い話では済ませられない。

「確かにそうなればまずいね。私たちは魔物にやられて死ぬから召喚獣を使うことに躊躇する必要がなくなる。後腐れがなくなるってわけだ。永遠にね」

流石に彼女を擁護していたウィザードも黙る。もともとパーティメンバーの調整は必要事項だった。それが繰り上がるだけだ。逆にこれ以上、ミアに関わればパーティの離散という最悪の結果が残る。しかし、それでも遺恨が残るのには代わりはない。

ミアは静かに立ち上がった。

「…………どこに行くんだ？」

彼らのメッセージウィンドウがポップする。それはミアのパーティ離脱を告げていた。

「今までお世話になりました」

彼女は氷水のように冷たい声と言葉で突き放した。先に異物として排除しようとしていたにもかかわらず、穴がぼっかりと空いたように彼らの心をすきま風が吹き抜けていた。

酒場を出た彼女はたった五人しか登録されていないフレンドリストを開く。登録されたフレンドをひとつずつ消去していった。

それが終わると新しい宿屋を探しに行こうと街の中央を目指す。もう女三人の相部屋にはならないので割高になるだろう。

後ろからは ウィザード が追いかけていた。彼女は気づいていないが、気にかける様子はない。

「待ってくれ」

「なんですか？ もうあなたと私は他人のはずですが？」

「すまない。本当にすまないことをした」

彼女は ウィザード が悪いなんてちっとも思っていない。きっと誰も悪くないとさえ思っている。強いていうならこの 世界 が悪いのだ。

「別に怒ってはいません。いずれ似たようなことが起こると思っ  
ていましたから」

「これからどうするつもりだ？」

「宿をとって狩りに出るつもりですが」

「ソロで狩れるところは少ないぞ」

「だから……なんですか？」

ミアが ウィザード を見上げた。ウィザード はその瞳の深さにぎよっとする。夜の闇よりも暗く、沖の海よりも底知れない。

「あなたはあの人たちといた方がいいでしょう。彼らのためにも、あなたのためにも。奔放な人たちなので扱いにくいでしょうけど、あなたにしかできないことです」

もう彼女の決意が固まっていることを知ると ウィザード は一枚のカードを差し出した。

マネーカードだった。ゲーム内通貨の譲渡を行うためのもので、現実の小切手に近い。その額は ウィザード の所持金の全てだ。

「迷惑料だと思って貰って欲しい。ちょっと少ないかもしれないが、回復アイテムくらいにはなると思う」

ミアにとってそのマネーカードは容易に使えるものではない。誰かを傷つけて、ひとりになって、迷惑料？ ずっと追い出した人を覚えていて欲しいということだろうか？

そんな目覚めの悪いもの、貰わない方がずっと楽だと思った。

「要りません」

「受け取って欲しい」

細い手がカードを払った。

「あなたは良かれと思ってやったことが裏目に出ることが多いようですね。どうしてかわかりますか？ わからないでしょうね。わからないなら教えてあげます。物事をあなたのものさしだけで測っているからです。あなたの基準はあなたのものでしかなく、他人のことを考えられないからです。あなたみたいな人を偽善者って云うんですよ」

久しぶりに口にした長い言葉は真っ赤に燃える炎のように激しい。両者を焦がし、二度と元には戻らないほどに破壊した。

彼女に返ってくる言葉はない。



買い物濟ませ、宿屋のベッドにスキルカードを並べる。

サモナー は後衛職の中では唯一序盤から単身での戦闘にも耐えうる性能があつた。前衛タイプの召喚獣以外でも装備次第では魔物と渡り合うこともできる。

もちろん、ウォリアー や ブシドー には攻撃力で大きく差を付けられ、ナイト はおろか シーフ ほどの固さも無い。悪くいえば器用貧乏だが、ミアはこのクラスの応用力に惹かれていた。何でもできるという特性を活かすには多くのスキルが必要だ。彼女は他のプレイヤーから使われなくなった初期配布のスキルカードをいくつも買い叩いている。

開始時にプレイヤーに配布されるスキルカードはランダム。これらを含め、職業に就かなくても扱うことができる好きエウはコモンスキルと呼ばれる。スキルは使い続けると熟練度が溜まり成長し、それにより新たなスキルを扱えるようになるという特性がある。

しかし、魔法使い系の職業に投擲武器を必要とするのコモンスキルは必要ない。筋力値が足りないために十分なダメージが与えられないのだ。魔法使いの心情としてはできることならさっさと使えないスキルカードは通貨に変え、新しい武器や防具を買いたい。

そこに目をつけたミアは買取専門の露店を開いた。クラスチェンジが多く行われた初日の夜から三日目にかけて大量のコモンスキルを仕入れた。露店を出すには商品の額に応じた場代を払う必要があったが、商品を並べないのでタダ同然で場所を借りることができた。

(これだけスキルがあっても使えないものばかり。どうしましょう……)

どれも決定力に欠ける。離れた場所が見える 遠見 は シーフの 索敵 系の劣化だったし、 スタミナ回復力アップ が必要なほど彼女にスタミナ値はない。

水の守護精霊の加護を受けているからと、ちょっと高めで買ったバブル は最下位の熟練度ではぶくぶくと泡が出るだけだ。風呂で楽しむ以外の使い道は思い浮かばなかった。

買った日に悲劇の人魚ごっこで遊べたのもとはとれているかもしれないが。

(おそらく バブル は防御魔法かな。炎が相手じゃないと全く使えないけど)

スキルはブックと呼ばれるカードケースに収められていなければフィールドやダンジョンで使用することができない。

ひとつのブックに入れられるスキルの数はスキルキャパシティによって決まっている。スキルにはそれぞれコストが設定されていてその合計がブックのスキルキャパシティを超えると街から出られない。

スキルキャパシティは基本値三十の他にプレイヤーランクや特定ボスの撃破などで加算される。プレイヤーランクは倒した敵の種類数やクエストクリアによって評価が加算され、一定を超えると次のランクになる。

今のミアのプレイヤーランクは冒険者に成り立てを意味する第九<sup>ジェル</sup>階位。コスト三十五までなら自由にブックを編集できる。これといった決まり手を持たない彼女はこれを最大限まで使い切るつもりだ。

(おおよそ半分は サモナー のクラススキル。 召喚術 がなければ ノービス と変わらない。 召喚獣 はアイテム扱いでほんとに良かった。 森に行くなら 昆虫採集 のスキルはあった方がいい…… かもしれないけど、できれば入れたくない……)

彼女は虫が得意ではない。

いつまで経っても決まりそうにないと思い、消去法で選ぶことにした。

持っていない武器のスキルが消え、街でしか使わないような生産スキルが消え、MP消費の多い魔法が消えた。

(結局、クロスボウ関連と近接戦闘用のコモンスキルかな)

こうして出来上がったものを見ると組み替える前とあまり変わらない。パーティ向けスキルの代わりに 昆虫採集 が入ったくらいだ。

(すぐく……面白くない……)

納得のいく出来ではなかったが、安全を考えるとそれ以外ない。剣でも持って大立ち回りできるほどの筋力値やスキルの幅がない。諦めると宿屋で不貞腐れたように眠り、夜が明けると アルラウネの森 に向かった。

まず、敵を迎え撃つ場所を決めた。

森の入口付近の見通しよく開けた場所だ。そこにマジックトラップの魔法をいくつか仕掛けた。MPを消費しすぎていけないが、上手く毒になつてくれなければ攻撃力が足りなくて殲滅できない。

次に森に入り、遠見で敵を探した。近くに頭に真つ赤な花を咲かせた緑色の肌の子供が孤立していた。アルラウネだ。こちらから攻撃しなければ襲つてこないタイプの魔物だ。

クロスボウで狙い撃つ。敵愾心ヘイトを持った精霊がこちらへと向かってくる。攻撃する前は温厚そうな顔をしていたが、もう見る影もない。ミアは蔓による攻撃を避けながら、畏の方へと誘導する。

迎撃地点にたどり着くとネコマタを召喚を開始した。花の精霊はマジックトラップによって地面から突き出た杭のダメージを受けている。ダメージは大きくはない。ただの時間稼ぎだ。

畏にかかっている間に召喚は終了した。

みゃーご、と尻尾を揺らすと精霊の茎に爪を立てて跳びかかる。ミアもクロスボウで応戦する。ひとつ、ふたつ、みつつ、と矢弾が刺さる。

十発目を射ろうと矢をつがえようとした頃だった。時間はかかったもののほとんどダメージを受けることなくアルラウネを撃破した。

(MPが思ったより消費している。一匹ならいいけど、向こうがパーティーで来られるとちよつとまずい)

トラップを使用したところはかけ直し、更に手前に第二防衛ラインとなるマジックトラップを仕掛けた。失ったMPは回復ポットで補給した。そのひとつだけでアルラウネを撃破時のドロツ

ブアイテムの値段を上回る。できるだけ節約したいところである。

再び、森の奥まで繰り出し、魔物をマジックトラップのところでおびき寄せ倒していった。三匹の小パーティに遭遇したりもしたがなんとか相手取れた。それを繰り返すうちに彼女のレベルとマジックトラップの熟練度が上がった。

見せかけの太陽が丁度頂上まで来た頃だ。

ミアの放った矢がはずれた。敵は赤毛の熊だった。攻撃はヒットしなかったが気づいて敵意の視線を向けている。矢は三十メートルほど離れたところにある木に刺さった。ミアは二射目のためにハンドルを回し、弦を絞った。

ふと彼女は辺りがざわめいていることに気づく。青い木の葉が熊の上に落ちた。熊に狙いをつけていた弓から顔を上げる。

がさがさと動く音。森全体がひとつの生き物のように波打つ。木が動いていた。根を足のように使い歩いている。幹についた狂人じみた顔は間違いなく彼女を見ていた。その数は四本や五本では済まない。ミアを照らしていた木漏れ日は次々と影に侵食されていく。

逃げようとするも回りの木のほとんどが迫ってきている。前後左右が封じられてはどうすることもできない。

倒すか、死ぬか。彼女に残された道は少ない。

(うーん、まいったなあ。トレントは火に弱いだろうけど私は相性が悪いから使えない。せめて油でもあれば……。できれば使いたくなかったけど仕方ない)

ミアはアイテムカードの中から召喚獣と回復ポットを取り出した。召喚獣のカードを見たとき、彼女の顔がわずかに曇る。試験官のようなポットを具現化し、飲み干す。濃い緑の液体が喉に絡みつく。嫌な味がした。

そして、彼女は召喚魔法を発動させる。

「お願い……エネア！」

六芒星から空を引き裂くように黄金色の暴力が降臨する。少女はまた糸が切れたように地面に倒れた。

ミアの視界に黒い何かが映った。

混濁した意識の中、切り札が消えるのは確認できた。ふっと体が鎖から解き放たれたように軽くなる。が、まだ魔力枯渇による泥酔感は拭い切れない。

「大丈夫か？」

低い声だ。そちらを見ると真つ黒な外套を着た男の背中があった。彼は槍を構え、わずかに残った樹木の化物と対峙している。

「ええ、なんとか。しばらくは魔力枯渇状態のせいで戦えそうにありませんけど」

「問題ない。これくらいなら俺ひとりでもやれる」

そうやって彼は魔物へと槍を向けた。

ミアは自分のことを差し置いて、彼のことを変人だと思った。適性を超えたレベルのダンジョンにひとり来て、拳句死に損ないの他人を助けるなんてどうかしている。

もし先ほどの光景を目にしていたのなら、もっと不可解だ。

彼は木が枝を振るうのを槍でいなし、懐へと潜り込んだ。敵は体は普通の木と変わらないくらいに大きい動きは緩慢だ。魔法にさえ気をつけられ彼の敵ではない。

何度か槍で刺すがHPバーはなかなか減らない。トレントは刺突耐性を持っている。彼はもちろんそのことを知っていたが、彼女の手前、知らないことを知っているのはおかしい。推測するに足る現象をデモンストレートしてから、槍をしまっ。

「こいつは厄介だな。槍が効かない。何が有効かわかるか？」

ミアは先日パーティで行ったときのことを思い出す。

（炎は間違いなく効果てきめんだった。他の弱点といえば……）  
「火とスタンです」

スタンは人間にたとえるなら軽い脳震盪が起こったときもしくは、電撃で痺れたときの状態である。化物とはいえ木に脳みそや導電性があるかどうか。しかし。設定上はスタンし易い。

「残念ながら火は属性が合わないな。スタンさせて様子を見るか」

後ろに控えていたもう一体の木が魔法を唱え始めた。男は前の一体の足払いをかわし、詠唱中の一体に接近する。細身の体が物理法則を越えて加速する。

右のストリートが化物の顔面にヒットした。漫画のように目がばつてんになってぴよぴよとヒヨコが飛んでいる。当然、詠唱は中断だ。

「なるほど、いけるな」

彼の使ったのはスキル ブーストストライク。武器の有無にかかわらず、高速接近して強烈な一撃を与えるコモンスキルだ。

しかし、飛び込んでいったために彼は二本の木に囲まれている。片方が上手くスタンしたからいいもののそう何度も決まるわけではない。

スタンしていない一体に向き直ると上段への蹴りから華麗な動きで連続技を決めていく。蹴り、突き、手刀、また蹴り。相手の体勢が崩れると木の枝に跳び乗ってそれをへし折った。化物が断末魔の声をあげ、倒れていく。土煙が収まると光になってしまっているため何も無い。

気絶していた片方もようやく目を覚ます。が、すでに遅い。二体で掛かればいい勝負ができたかもしれないが、たった一体では槍が効かずとも相手ではなかった。

膝に手をついて立ち上がったミアに男は薬を手渡した。小さなフラスコのような入れ物に入った紫の液体だ。

「万能薬だ。知り合いの アルケミスト が調合したばかりの新作だ」



「ありがとうございます」

飲むと頭の中の揺れが収まった。

周囲には無数の穴が穿たれ、いくつもの木々が倒壊している。ここで何かがあったのは容易に想像できるだろうが、男の反応は彼女の想像より遥かに薄い。むしろ、彼女の方がこの黒い男へ好奇心をそそられていた。

「助かりました。トレントを起こしてしまっただみたくて」

「なるほど。それは災難だったな。トレントの木には見分け方があってな。この森には広葉樹と針葉樹があるだろう。この辺りに針葉樹見当たらないのはそいつがトレントだからだ」

見渡すと確かに葉の平たい木しかない。ミアは今まで気づかなかったがそういう法則があったのかと得心した。

「こんなところに何しに来たんですか？」

「ボスを狩りに来た」

さも当たり前のように言った。

木の化物を倒すのにかかった攻撃回数を考えれば特別レベルは高くないはずだ。プレイヤースキルは目を見張るものがあったが、単身で倒すのは無謀だ。

「ひとりですか？」

「そちらもひとりのようだが？」

「ええ、そうですけど……」

しかし、こちらは自分の無力さを痛感したばかりだ。つまらない意地を捨てて、森から一目散に駆け出したかった。

「なら、手伝ってくれないか？」

彼の口調は飽くまで何気ない。出かけた帰りに料理屋にでも寄ろうかというような軽やかさだ。

ミアの脳裏に昨日のことが浮かんだ。また、面倒なことになるのか。それとも、その身ひとつで化物に突撃するような突飛さで受け入れてくれるのか。

差し出された手を冷たい目で見る。

(これは助けてもらった恩の分。信じるとか信じないとかじゃなくて、けじめだから)

レザーの籠手を握った。パーティが成立する。

「俺はクライ。ウォリアーだ」

「ミア。サモナーです。よろしくお願いします」

本当にこの森の主を倒せるほど彼が強靱ならば、信じられるかもしれないと思った。遠く離れた異国の地で初めて同郷の人にあったような気分だった。

「行って！ デュオ！」

ネコマタがジグザグに走る。

その先には大きな角を持った芋虫が群れをなしていた。運が悪ければ成虫とも出会ってしまうだろうか。ミアは考えるだけでぞっとした。

蝶ならばまだなんとかなりそうだが、蛾であれば最悪だ。できることなら倒した後のマテリアルカードすら触りたくない。

小さな爪が虫の柔らかかな肉を裂いた。追いつきとばかりにクロスボウの矢が虫を樹の幹に磔にする。

「クライさんは右をお願いします」

彼は目で頷くと、さっと身を翻して場所を変えた。そこで縦横無尽に槍を振るう。彼の繰り出す連続突きはスキルを使わずともかなりの手数になる。

こちらへ向かってくる虫たちがマジックトラップの杭に貫かれた。ハンドルを目一杯まで回して矢を射ると、貫通して地面へと突き刺さった。虫たちは光となって消える。

「お疲れ様です」

クロスボウを仕舞う。スキルを使用していないのでスタミナ値は減少していない。それなのに妙に疲れた気がした。

「何、これくらい造作も無い。むしろミアに負担が掛かり過ぎではないか？」

ミアは首を振って否定する。ひとりで戦うよりはよっぽど楽だ。

ふたりが出会ってからいくつかの戦闘をした後、クライがある提案をした。それは戦闘を指揮をミアが執るように求めたのだ。

前衛よりも後衛の方が精神的に余裕があるし、サモナーの召喚獣も扱うなら連携も取りやすくなる。最も召喚獣に対する指示はあまり細かくはできない。使用スキルと攻撃対象、それらのタイミングくらいだ。

彼の案は理には適っているが、実際にそれを提案できる者は少ない。何せ彼女の見た目は年端もいかぬ少女である。そんな人物に妄想とはいえ命を預けることは難しい。また、ミア自身に対しても負担がかかる。彼女は気を遣うのに向いていない。

まるで本物の軍人のようだ。合理的過ぎる。

「この程度で音をあげていてはボスには勝てないのでは？　このボスはトレントの上位種でしょう？」

つまり、ボスはさっきの木の化物と同じ特性を持っている可能性が高い。クロスボウや槍の属性は刺突。更にはふたりの守護精霊が水と地なのだがどちらのダメージを軽減されてしまう。相性は最悪。正面から挑んでは万に一つの勝ち目もない。

「その通りだな」

クライは背を向けてさつさと歩き始めている。彼の持つ地図に寄るともうボスはすぐそこだ。

少し行くと広場があった。ボス直前、最後の休憩地点になる。結界が張られているため魔物が入ってくることはない、という設定だ。

「少し休憩しよう。MPは十分回復しておいてくれ」

「はい」

と、腰を下ろそうとすると一匹のカブトムシが傍らの花にしがみついていた。花はあまり大きくない。どうやってこのサイズのカブトムシがしがみつけるのか疑問だった。彼女は恐る恐るカブトムシを摘み上げる。

カブトムシの頭の上に ナナホシテントウ と書かれたバー表示された。

(グラフィックが追いついていない……。もしかして、このコスモスみたいな花も……)

そつと花を手折る。たんぽぽだった。

彼女はそれらをカードにしてアイテムケースに仕舞った。釣り  
の餌かポーシヨンの材料くらいにはなるはずだ。

「昆虫採集のスキルか」

「ええ。大したお金にはならないでしょうけど、せつかく森に来たので」

もしスキルがなければあっさり逃げられてしまう。ただし、昆虫採集の熟練度が低ければレアな虫、たとえば コーカサスオオカブト や タمامシ (全てカブトムシのグラフィックである) も同様だ。しかし、彼女は積極的に熟練度を上げるつもりは毛頭ない。

もうひとつ、野草採集 というスキルも存在する。こちらが足りない和高位の薬草を摘み取ったときに植物が枯れたり、毒を受けたりする。

クライはパンを取り出して食べ始めていた。ミアと目が合うと彼女の分のカードを投げて寄越した。空腹値にはまだ余裕があったが

無碍にするのも悪いとかぶりついた。カードの形態を見た後では少々味気なかった。

「そろそろ聞かせてください。どうやって、エルダートレントでしたっけ、を倒すんですか？」

武器も効かず、魔法も使えない。素手で殴りかかっているのは持久力で負ける。なんといっても彼はひとりでもボスマンスターを倒すつもりだったのだ。何か策を持っていて当然だろう。

「策は特にない。けれど、スタンは効くんだろうか？」

「ごくん、とパンの塊を飲み込んだ。ブーストストライクには多少のスタン効果があるが、微々たるものだ。それを当てにして突っ込むのは無策に等しい。」

「だから、<sup>ギフト</sup>先天スキルを使う」

その目は負けるつもりはないと語っている。話を聞いた彼女の目も次第に似た光を放ち始めるのだが、そのことをまだ彼女は知らない。

二対の目が大樹を見上げた。

先が森から煙突みたいに飛び出ている。ダンジョンに入らずとも遠見 を使ったミアなら見えただろう。鼻のように葉のない枝がひとつ下方にある。そこが顔だとすれば悪い魔女のそれだ。

「HPが半分切るとモブの増援がある。一度だけだ。油断できない。三分の二を切ったらミアが合図をする。HPとMPはそのときに回復、だったな」

ミアが頷く。これらのことを掲示板を使い、調べたのはミアだ。これだけ入念な用意をしてもまだ十分とはいえない。しかし、現状に於ける最善は尽くしたつもりだ。

クライが腰を落とし、構えをとる。

ふたりはゆっくりと大樹の魔物の領域へと足を踏み出した。かさぶたのような木皮がめくれ、真っ黒な目玉が現れた。

まるで生き物のように地面が隆起する。木の根だ。八本の根がしなり、ふたりへと伸ばされる。

「行くぞ！」

「はいっ！」

徒手空拳のミアはクライの背後から二尾の化け猫を召喚した。クライの肩を足場に、跳躍し木の根をすれ違い様に薙いだ。

根はただの攻撃のための武器ではない。魔物本体のHPに繋がっていた。だが、それは本体に攻撃するより与えられるダメージは低

い。

クライは槍を片手で持ち、空いた手を掌底から地面へ向けて放つ。土煙が上がった。地の精霊の加護を受けた者だけが使えるコモンスキル グラウンドブレイク によって大地は抉れ、木片と化して大樹の武器が散る。

大樹はその巨体を左右に揺らす。それによって一本の木ほどもある枝がクライの横から殴りかかった。咄嗟に具現化した槍で受け止めるも、勢いを殺し切れない。HPの一割を削られ、地面を転がった。

それでも幹への攻撃は諦めない。猫の援護を受け、再生する根を掻き分けるようにして槍を繰り返す。突きに特化しているウィンドスピアでは根を切り落とすには至らない。

再び木が体を震わせた。今度はさっきよりも小刻みだ。

「クライさん！ 上です！」

上からは葉と共に硬質化した茶色い木の実が雨あられと降り注いでいた。先ほどの攻撃と違い、面を制圧するような攻撃にクライは槍での迎撃を選択した。

正確無比な速さと角度で、頭上の弾丸だけを処理していく。

この攻撃を発動させた後、大樹の化物はほんの短い休止状態に入った。その一瞬は一切の追撃がない。たとえ、コンマ一秒の間でも彼は見逃さない。

黒き槍が地を駆けた。

「ギフト先天スキル……アンベアブラッド《雷の血潮》！」



槍の先端から外套の裾まで体中が光る。雷を表す紫の光だ。バチバチと音を巻きちらしながらやっと思いた槍の一突き。初めて大樹にまともなダメージを与えた。

全てのプレイヤーは強制的にエデンの園を模したダンジョンでチユートリアルを受けることになる。その終点には知恵の実がなる木が存在し、プレイヤーはそこでひとつの林檎を受け取る。

そのアイテムは恵みと呪いを与える。後者は特定の状況下において戦闘能力低下したり弱点が増えたり、などというものだ。

そして、恵みはスキルカードを凌駕する性能を持った固有能力。その力は唯一無二。ひとつとして同じものはなく、それ故に最善の成長ルートはプレイヤーの数だけ存在する。この 世界 に生まれるときより備わっているために、それは先天スキルと名付けられた。

クライに与えられた力は《アンペアブラッド雷の血潮》。

彼の敏捷値は増加し、全ての近接攻撃に雷の属性、そしてスタンの状態異常が付加される。雷は火、風の複合属性である。よって今のクライの槍は物理属性の刺突、精霊属性の火と風の効果を持ち、攻撃時にはその中から最もダメージ係数の大きい属性が適用される。本来、地の加護を受けている彼は相反する風属性を扱うことのできない。弱点を打ち消し、天敵すら格好の獲物となる。この先天スキルはまさにクライのために存在するような贈り物ギフトだった。

魔物の額辺りにスタンの状態異常を示すアイコンが灯る。

「効きましたね！」

ミアが動きを止めて、クロスボウを具現化させた。動けない状態の敵に一心不乱で矢弾をぶつける。クライはまだ雷をその身に纏っていた。

大樹がスタンから解放されるとまた再び、雷の一撃を穿つ機会を伺う。それが決まればやはり全力でHPを削る。大樹はその場から動くことはないので攻撃にさえ注意していけば容易くスタンを決められる。

これを繰り返すことによって大樹のHPは半分を切っていた。もちろん、途中で回復アイテムを摂ることは忘れていない。

どこからともなく木の化け物たちが現れた。大樹を守るべく、根の足でクライたちへと迫る。

しかし、それも束の間。木の魔物たちはミアが攻撃から逃げ回りながら仕掛けたマジックトラップによって動きを束縛される。

ネコマタとクライ、そしてミアの矢弾によって増援が瞬く間に打ち倒されていく。まるでそうなるように決められていたのかと思うほどに呆気無い。

ミアは勝利を確信する。頬が緩んだ。

彼女の頭上に影が差した。

ミアへ大樹の魔手が振り下ろされていた。クライが木の魔物に烈火のごとく殴りかかっている。ウィザードよりは硬いが、布製のローブを装備しているのは脆い後衛職であるということに変わりはない。この攻撃を受ければHPバーの色が反転するのは火を見るより明らかだ。

クライはちらりとそちらを確認する。重いクロスボウを持ったミ

アは動けない。ならば、魔物をどうにかするしかない。

槍を取り出し、投げた。スローイングスピアのスキルを持つ彼の攻撃ならば怯ませるくらいはできる。更に《雷の血潮》の効果も付加されているとなれば、まず間違いない。

確かにその目論見は果たされた。ミアを逸れた太い枝が地面を叩く。ミアはクロスボウを仕舞うと同時に木の下をくぐり抜ける。

ふと、彼女の足に何か当たった。

それは真つ二つに折れたウインドスピアだった。二メートルあったはずのそれがどちらもミアの身長以下になっている。手に取ると耐久値に 0 の表示。

「クライさん！」

「ああ、わかってる。悔しいが今回は失敗だ」

《雷の血潮》アンベアブラッドを最大限に活かすには槍のリーチの長さは欠かせない。素手では強烈な攻撃を放てる当てられる頻度は著しく低下する。そうなれば自然とスタンさせられる回数も減るだろう。結果、遠くない未来には《雷の血潮》アンベアブラッドの効果時間が切れ、ふたりに勝ち目がなくなってしまう。

もうHPが四割を切った大樹を目の前にミアは歯噛みする。昨日のことなんてとつくに忘れていた。ただ、こんなに心躍る戦いの結末が敗北であるというのは何故か許せない。自然とその心情が顔に出る。

「何か手があるんだろう？」

「わかりますか？」

ふたりは大樹の攻撃を踊るようにかわしている。

MPは最大値の半分。敵が一体だけであることを考えれば長過ぎるくらいだ。

「死ぬかもしれませんが」

「もう似たようなものだ」

「ドロップを持ち逃げするかも」

「勝つてから言え」

「戦闘が終わったら面倒見てくれますか」

「一蓮托生だな」

「最後に、裏切らないと誓って下さい」

恋人同士の告白じみた質問にもクライは確かに頷いた。

それを見たミアの唇がにやりと弧を描いた。

取り出した一枚のカードにははつきりと 90 の数字が浮かんでいる。猫の召喚を解除し、カードを大樹へと向ける。

「これを召喚したら私を抱えて逃げて下さい。できるだけ遠くへ、できるだけ速く」

彼は何も聞かない。これは信頼だろうかと彼女は考える。どちらかというと利害関係の一致の方が近い気がした。しかし、その乾いた関係が心地良い。

獣の名を呼ぶ。

背に温かい何かに触れた気がした。そのまま彼女はコンピュータが落ちるように意識を失った。

開発者は 彼ら を アイク A I C と名付けた。

A I は人工知能、 C はキャラクターの略。

その頭脳となるのはは最新の科学技術が惜しみなく使われた陽電子頭脳であり、現実世界のロボットにも搭載されている一級品だ。

そちらは一台が時価数百万円を超える。ロボットにはボディの値段も含まれている。

開発者は頭脳の技術だけを買い取り、仮想現実の体を与えた。

記憶領域には必要な知識を詰め込み、行動パターンや性格によって個体差を生み出す。この個体差が重要だった。たとえば、クライに与えられた知識は極端に偏った武器のデータであり、その戦闘技術は開発者のひとりから取ったものと本物の達人の動画から合成されたものをベースとしている。更にはスキルによる攻撃も加え、考えうる限りの最適化がなされていた。

A I C は正体が露見することはもちろん、疑われることも禁じられている。そんな面倒なことを設定した理由は至ってシンプル。

怖がられるから、だ。

もし、隣人が人間ではなかったらどう思うだろうか？ 学校の先生や医者や警察官、その他諸々の周りにいる人間だと思っていた誰かが機械だと知らされる。その情報は人を孤独の真っ只中に陥れるだろう。

その上バーチャルリアリティの世界では人と電腦の境界は曖昧に

なる。外見上の違いすらなくなった。彼らは人間とほぼ同質のものとなっている。少なくともこの世界の中でその人がAIではないことを証明できる者は誰一人としていない。

話を戻そう。もともと彼らの基本的な役目はGM、ゲームマスターの補佐としてゲームを円滑に進めることだ。

版として解放するまでは開発者のもとで一般常識や《Genesis World》の基礎を学んだ。それこそ本物のゲーム初心者のように。

オープンではついに何も知らない一般の人々と接する。これはVRの世界でも初めてのことだった。今回は大多数が一般のプレイヤーを装って参加している。

他にも特定の場所で地縛霊のように待ち構えているNPCの中にも彼らと同等の知能を持ったものが存在する。後者は感情の起伏は控えめで一見しただけではただのNPCと見分けがつかない。これはAINPCと呼ばれる。

そして、ログアウトが不能になるという事件が起こった。彼らもまた開発者との連絡は絶たれ、回線を切ることもできない。彼らの今後は絶望的に思えたが、それよりも重大なことが彼らにはあった。

アシモフのロボット三原則のようなルールに彼らは縛られている。その最も重要な項目は例に漏れず人間の安全である。魔物のいるダンジョンへと赴くのはゲームであるからしょうがないとしても精神的な苦痛や疲労は取り除くべきだ。

バグを防ぎ、和を保ち、初心者を導く。ミアに召喚獣を託したクラスマスターもそうだ。危機を乗り越えさせるために自らの持つ切り札を渡した。

また、クライもそのために任務を受け、今日も今日とて槍を振る。

「で、すごすごやられて帰ってきたというわけかい」

いつになく辛辣なノイにクライは返す言葉はない。

ミアが気を失った後、クライは彼女を抱えてその場を立ち去ろうとしたのだが、触れるより先に黄金の尾によつて払い飛ばされていた。その後、ミアも復活の十字架へと転移してきたことから討伐は果たせなかったのだとわかった。

ノイは椅子に座ると足が地面に届かない。ぶら下がるようにして机に腕をのせている。机の上には他に茶と最近出回り始めたばかりのパンケーキがある。

「ま、あんたでもそういうことがあるかもね。武器があれじゃふたりでは無理か」

「槍が壊れなければなんとかなっただがな」

「その管理も実力のうちさ。それより嬢ちゃんは無事なのかい」

クライがゲームの管理者に与えられた任務は『偶然にも行き過ぎた力を持ったプレイヤー』の監視と保護だった。ゲームにある程度の運の要素を持たせるとどうしてもレベルの低い初心者が強力な装備やスキルを手に入れることがある。

それは往々にして争いを生む。嫉妬や羨望、畏怖が争いの種となり、結果として彼、もしくは彼女はゲームから離れていく。もしくは

は、逆にその不相応な力を悪用するかもしれない。

そうしたトラブルを防ぐためにクライはできる限りそうしたプレイヤーの近くで監視と保護を行うよう設定されていた。

「宿屋に運んでおいた。それにしても人の精神とは厄介なものだな。ゲーム中に意図せず意識を失う事例など聞いたことがない」

平時であれば脳波に異常があった時点で強制ログアウトだ。この異常の中であるからこそ起こり得たことだった。当然そんな事態にマニュアルは存在しない。

「そのときは召喚獣を使っただね。それもレベルの高い」  
「そうだ」

「もしかすると脳に負担がかかったのかもしれない。あたしらと違って人は休息を必要とする。ゲームの疲労値なんかとは別にね」

彼は万能薬を渡したことを思い出した。あれのせいもあって、彼女の仮想の肉体を取り巻く環境は著しい変化を繰り返していたはずだ。

「もう使わせない方がいいかもしれないな」

「だねえ。難儀なことになったもんさ。どんなに頑張ってもあの召喚獣は使えないんだから」

「やはり使えないか」

「彼女に獣の適性があるといっても召喚する魔物のレベルが四、五高くなつちまえば言うことを聞かない。方法もないだろう。クライは限界を超える方法を知っているのかい？ まだあそこから先は未完成なんだ。データも何もありゃしない」

「上限レベル80……か」



彼らの与えられた知識のひとつだ。プレイヤーたちはオープンではこのレベルを超えることはない。何故ならそこまでしか創られていないからだ。

故にミアはどうやって黄金色の獣を扱えない。

「呪われてるねえ」

「だが、彼女はそんなものを使わなくても戦える。あの機転があれば大抵の困難は切り抜けられるはずだ」

「後はあんたがもつとしっかりしてくれれば最高だね。他に必要がなければあの子に付いて行くつもりなんだろう。そうだ。今回の報酬の代わりといっちゃあ何だけどこいつを貰ってくれないかい」

鍛冶であちこちが固くなった手で一枚のカードを机に置いた。クライはこれに似たカードを見たことがある。書いてある数字は違うが間違いなく召喚獣のカードだ。

「レベル25か。どうしたんだ？ 仲間 からか？」

「いいや、隣さ」

爆発音がレンガで出来ているはずの工房を揺らした。窓がカタカタと鳴る。続けてガラスの割れる音。建物に遮音を設定しておけば聞こえなくすることも可能だが、この家は設定していないようだ。

「アルケミスト か」

そのクラスはポーションや衣服、アクセサリなどを開発できる生産職だ。多くのスタイルが存在し、一番情報が必要とするクラスでもある。ペットの魔物を合成することも可能で、そうした場合は強力な召喚獣のカードになる。

どうやら隣人は新しい何かを開発中らしい。音からして攻撃系のアイテムを作っているのだと思いたいが、クライの心中にある不安のかけらは消えそうもない。

「そうさ。私もそつちの鑑定のスキルがまだない。怪しいポーションを押し付けられそうになったから代わりにこれを買って凌いだつてわけさ。少々お金も取られたがね」

手に取りカードの情報を表示させる。

「しかし、これはなかなかいいものだろう。ケルベロス じゃないか。これを合成するには三体の魔物が必要になるから値段をつければ相当のものだぞ」

地獄の魔獣とも呼ばれるそれは三つの頭を持つ犬の姿をしている。彼の知るそれは火の属性のはずだが、その情報ウィンドウは闇を示していた。

しかし、ノイの顔は何やら困惑の色を浮かべている。

「ただのケルベロスなら良かったんだがねえ」

「レベルもいい感じじゃないか。保護対象に持たせればいい武器になる。それより俺の武器だ。壊れたのはさつきも言っただろう。新しい槍が必要だ」

「とりあえず、あつちの部屋から選んでおくれ。二、三日にはあった好みができる。少しの間だけなら十分使えるのもあるだろう」

言われた通り、工房の方へ行くと確かにたくさん武器がある。

おそらくは今日の売れ残りなのだろう。あまり売れ行きはよくないようだ。

クライが槍を漁っていると来客があった。ヴァレンチノだった。

「どうした。今朝来たばかりだろう」

「ノイ殿に頼まれてな。レデイの頼みを断るわけにはいかん。むしろ、世話になっているのだから喜んで協力したというわけさ」

ヴァレンチノが数枚のカードをテーブルに並べた。

「遅くなったがこれで間違いないかな」

「ああ、ばつちりだ。ありがとうよ」

それを見たクライの顔が渋いものになる。

カードはエルダートレントのドロップだった。クライが帰ってきてから狩り頼んだのでは間に合わないのは彼もよく知っている。当然のノイは何食わぬ顔で紅茶を啜っていた。

ミアはフレンドがどこにいても話すことができるというコールをかけるべきか思案していた。指先が中空を彷徨う。初めてのコールだから迷っているのではない。自分と相手の距離に躊躇している。

と、先に相手からコールがあった。狩りの誘いだった。同じ事を考えていたので一も二もなく了承する。

結局、ふたりの利害は一致したのだ。

彼は彼女のことを何も聞かないし、自分のことをひけらかすこともしない。何より彼女がクライと一緒に戦ったボス戦の虜になっていた。

召喚獣とクライとミア。詰将棋のように一手一手が真剣になれる。彼女の思い描いたバトルができる。息が詰まるほどのぎりぎりの戦いこそやはりゲームの醍醐味だ。予想以上に上手くやれたことも理由のひとつだろう。

彼と居ればこのくすんだ 世界 もゲームの舞台になる。

ふたりは アルラウネの森 で数日の間狩りをし、また大樹の魔物へと挑んだ。

レベルの上昇に加え、予備の槍を持っていったおかげで快勝だった。この前の敗北が嘘のようだった。

午後九時。もういい加減狩りも終わって森から引き上げようとしたときだった。

ちりーん、と、いつか聞いた鐘の音がした。  
メールを読み終えたミアがじつとクライを見た。

「困ったことになった……かもしれないな」

そのメールは以前の続き。そして、更なる悪夢の始まりだった。

Sub: 【<天地創造>のご案内2】

from: Noname

人の子よ 汝、試練を受けよ

七日夜を経て世界は創り変えられた

古き神、夜 が目覚めた

神の敵が娘、罪 が扉を開けた

そして、恐るべき 死 が解き放たれた

罪 の子、神の敵の子、あるいは孫である 死

死 は汝らを追うだろう

人の子よ、警戒せよ

死 はいついかなるときも汝の首を狙う

人の子よ 汝、神の敵を討ち滅ぼせ

土に還るその前に

機能 復活 が消失しました。

世界 が更新されました。詳しくはオフィシャルサイトを御  
覧ください。

ミアはクライに連れられて、カナンの街に戻った。

街は人で溢れていた。どうやら遠征に出ている冒険者たちも皆戻ってきている。メールの文面から命の危険を感じたからだろう。

宿を出るなど口を酸っぱくして言われたが、この面倒な状況で外に出る気などさらさらない。なのに、当のクライは彼女を置いてどこかへ消えていった。

ミアの方はたまにそういうことがあるのを知っていたし、いつも鍛冶屋に行っていると言われていたので今回もまたそれだと思った。体を使わなければ得られない情報もあるが、今そうするにはリスクが大きい。ここにいて出来ることがあるならミアはそちらを選ぶ。

彼女はメニューを開き、掲示板のページをめくった。

場所はいつもの如く、ノイの工房。

今回は筋肉質な聖騎士、ヴァレンチもいた。重厚な鎧を身につけたまま、腕を組んでいる。英雄か何かの銅像のようだ。

「で、状況は？」

「あまり良くないね。さっき死んだ仲間が戻っていない」

と、ノイが答える。クライの表情が曇った。

「メールの直後、空から槍が降ってきて復活の十字架を砕いたそう

だ。我輩がその現場を見たわけではないが、砕かれた後のものは確認した。槍も依然としてそこにあったが地面に刺さって誰にも抜けなかった」

ヴァレンチノが補足するように付け加えた。

どうも視覚的にも逃げ道がないことを表しているようだ。相当手が込んでいる。黒幕が何者かを知ることにはできないが余裕はありそうだ。この分では外部から事態の收拾をつけるのは期待できない。

「ロンギヌスの槍ってやつかねえ」

独り言のようにぼつりと言った。

「神話の関係か？」

「神話、というかキリスト教の話だね。もともと復活の十字架するのはイエス・キリストが処刑された現場を再現したものなのさ。そのとき、イエスを刺したのがロンギヌス。彼の持っていた槍はイエスの聖なる血を受け、聖遺物となった。で、当のイエスは墓から復活したってわけさ」

「聖遺物？」

「奇跡の種みたいなもんだよ」

ノイは持っていたチーズを真つ二つに裂いた。繊維質なそれは綺麗に別れ、片方は口の中へと運ばれる。適度な酸味と塩味が舌を刺激した。

「けど、まあその象徴が破壊されたからにはこの世界で復活はできないってことだね」

「くだらない話だ。そんなことをしてどうしようというのか」

「脅し、みたいなもんだろう」

犯人はゲームとして楽しんでる節がある。そうではなくてはゲームクリアを条件にはしないだろう。もつと酷いのは関わる全ての人間がただ苦しむのを見たいという最悪最低の人間が敵に回っている場合だ。そのときはこちらから打つ手はなく、ただ襲い来る試練を黙って耐えるしかない。

「ノイ、話を続けてくれ。メールには 世界 の更新についても書かれていたはずだ。そちらについては何か情報があるか？」

あれに従ってオフィシャルサイトでもチェックできればいいが、この 世界 からはアクセスできない。ふざけている以外の何物でもなかった。

「ああ、それに関してはあたしも 仲間 も何もわかつちやいないよ。すぐにわかるもんじゃないのかもしれない」

まだそんなに時間も経っていない。本当に何かが変わっていたなら嫌でも理解させられることになるであろうことは容易に予想がつく。

「しかし、我輩に入ってくる情報量が増えている。これを判別する能力がないのがとても残念だよ」

陽電子頭脳でもって理解できない情報はすぐに切り捨てられる。いくら巨大な記憶容量を持っている AIC <sup>アイク</sup> といえど、全てを記憶してはいつかはパンクしてしまう。彼ら は常に必要な情報を無意識のうちに取捨選択していた。

「そういえばこの 世界 が現実に近づいているってどこぞのギル



ドの人が言つてたねえ。その意味があたしにはよくわからない。だけど、人間には味覚とか嗅覚っていうのがあるらしい。同じ料理でも味がぜんぜん違うそうだ」

彼ら の知覚する味覚とは数字によって表示される。おいしくても快感は得られないし、匂いは全く気にならない。ただ数値が悪ければその値域に決められた反応を返すだけだ。

「これは今すぐ答えの出ることではないな。追々調べねばならん。して、我輩たちはこれからどうすれば良い？ 確か数日後には最初の 魔将 を討つ予定であつたな」

魔将 はストーリーを攻略する上で絶対に倒さなければいけないボスモンスターだ。神の敵であるサタンの配下として高位に君臨する。当然、その強さは他の魔物とは比べるまでもない。

「できれば誰も死なせたくないんだけどねえ。早めにしないと焦つた人間たちも無闇に突っ込んでいつちまうかもしれない。現実世界はどうなってるかもわからないし、何もかも早いに越したことはないのさ。とりあえず一度攻めてみることにしたよ。人間よりも先にね。それなら負けても情報を流せるし」

ノイが机にフィールドマップを広げた。攻めるべき 魔将 の城が赤い丸で囲まれている。驚くべきはノイのマップが既に完成していることだ。全ての街を回って地図を買い集めなければならぬ。これには他の A I C たちの手を借りていた。

当の魔城の適性レベルは28とぎりぎりだがやれないこともない。ボスを倒すだけならクライとヴァレンチノのふたりだけでもできる。だが、そこまで行くのが厄介だ。到着に時間がかかるし、出現す

る魔物が手強い。近隣に街はなく、野宿を強いられる。馬車や大型のペットモンスターがあればいいが、まだそこまで市場が成熟していない。

「ちよつと遠くてね。その上、メンバーが足りてない。猫の手も借りたいくらいさ」

今のところ決定しているのはクライとヴァレンチノを含む AI C が四人。魔將 との戦いが六人までのパーティひとつと考えるてもふたり分の穴がある。

「しかし、俺が行くとなれば保護対象も連れて行くことになるが？」  
「そういえば、貴殿の任務にもあったな。ずっとひとり狩りをしてるって聞いていたので忘れていたよ。職業は何だ？」

「サモナー だよ」

ノイの答えにヴァレンチノは不満気な態度を隠そうともしない。

これでパーティの面子は ウォリアー、プリースト、アーチャー、ナイト、サモナー となる。

本来回復役のプリーストがソロ狩り特化の重装備のヴァレンチノであるから、少しサポートが弱くなる。アタッカーは十分揃っているので補助魔法メインのウィザードか全体回復特化のプリーストが最適解だ。

「サモナーには無理だろう。長丁場になる」

「戦えばわかる。むしろボス戦でこそ欲しい人材だ」

「そこまで言うなら我輩も信じるさ。見もせず批判するのは我輩の精神に反する。が、実際に見て付いて来られないようなら帰って貰うがな」

ぐらり、とクライの中で重い物が揺れた。子供が宝物を馬鹿にされたのに似ている。他人から見ればどうでもいいようなものだが、彼にとつてはとても大切なもの。

けれど似ているだけだ。それは感情と呼ぶにはあまりにも機械的な反応だった。彼は彼女が自分の保護すべき対象だからそう感じずにはいられない。

「わかっている」

A I C は感情と表情が結びつかない。少なくともそういう風に出てくる。そもそも数値化された心の動きなんて誰にも上手く扱えない。

「我輩も人間ならば当てはある」

ヴァレンチノが言った。

「また人間？ 死んでは元も子もないよ。そう簡単に人間を増やしてどうする？ 五人でもなんとかなるんじゃないのかい？」

ノイの言葉に彼は不敵に笑う。

「そう易々と死ぬような御方ではない。そんなことよりも我輩が足を引っ張るのではと不安になるくらいだ」

「お前にそう言わせるとはなかなかのようだな」

「クライも我輩もいる。そう簡単には落とさせはしない。議会に一度訊いてみてくれないか？」

更に話を詰め、彼らの総意が固まった。敵を打倒し、一步先へと進む。あらゆる困難は跳ね除けなければならない。彼らに

だって自己保存の原則はプログラミングされている。

ミアは自らの与り知らぬところで 魔将 への挑戦が決まった。

彼女 が深い眠りから目を覚ました。

一体どれだけの間眠っていたのだろう。ずっと長い間だったのか、それともほんの一瞬なのか。

彼女 の感じる空白の時間はたとえ一秒に満たないものだとしても、実際のそれとは大きく異なる。

彼女は自身の体が蹂躪され、深く傷つけられていたことに気づいた。肌は抉れ、内蔵は千切れ、血が止め処なく溢れている。本来の居場所からは放り出され、ありとあらゆる衣服も喪失していた。

異変を感じ取った 彼女は 注意深く胎内を観察する。真っ二つになったへその緒の一部が埋まっていた。更に降下すれば恐慌と混乱で満ちた大地が広がっている。

どくん、と巨大な肢体が跳ねた。何かガン細胞ごとく体を侵略していた。その部分は黒と白のまだらに変色している。崩壊はこれによるものだった。

しかし、得体の知れない何物かがもたらすのはそれだけではない。柔らかいはずの肌はみるみる硬質化し、棘のように鋭い産毛を並べていく。手足の関節はもうすでに動きが封じられていた。

瞳に赤信号が灯る。

自浄作用を司る末端細胞へと指令を送った。血が巡るように電気信号が動き出す。

彼女は世界。

《Genesis<sup>ジェネシス</sup> World<sup>ワールド</sup>》で最も巨大な人工知能であり、また《Genesis World》そのものである。

クライはコミュニティの勧誘を受けていた。

コミュニティとは主に情報共有の装置だった。通称コミュと呼ばれるそれには専用の掲示板が与えられ、ギルドよりも緩い制約で結ばれたプレイヤーたちは情報交換を行う。開設資金が必要ないが、情報共有以外のメリットがない。ギルドに所属していたもこれに参加することができた。

彼が誘いを受けているのは 世界 からのものだった。

その名も 無血同盟。

AIC とこれから決意、両方の意味が込められている。

無論、クライは 世界 の決定に逆らえない。逆らわない。了承を選択し、コミュニティへと加入した。メンバーリストをにはすでに五十を超える AIC たちのハンドルネームが並んでいる。

まだ掲示板への書き込みは一件しかない。

Name 世界

気をつけて下さい。世界は変わりつつあります。

私はすでにあなた方の知る世界とは異なります。

この度の变革は規約コードに違反しています。

幸い、ストーリーボスを全て倒すことでログアウトの機能は解放されることを確認できました。

人々を守り、速やかにゲームクリアを目指して下さい。

最優先は人命です。しかし、無用の犠牲は禁物です。

あなた方の力なしに事態の収束は望めないでしょう。

できる限り生き延びて下さい。

進展があれば追って報告します。

ご武運を祈っています。

俗に北の平原と呼ばれるこの場所は彼らのレベルよりも下級の魔物が出現する場所だ。昼間であれば一面に草原が、遠くの間々が見える。それほどまでにのどかで牧草的な雰囲気は現実の日本では失われたに等しいものだ。

また、ここは生産職でも十分に通用するので食肉と材料の確保のために多くのプレイヤーたちが訪れるところでもあった。

今クライがいるのはそこでも最も奥まった地点だ。

ここを抜け、山と谷をひとつずつ越えれば 魔将 の城がある。クライとミア以外はベットや乗り物を所有しているので彼らより遅くに出発し、城の手前で合流する。

野営地に戻った彼は頭を抱えた。

「何故ベットがある？」

石造りの巨大な寝床が焚き火に照らされている。しかもクイーンサイズ。ミアはそこに布製の防具や動物の毛皮を敷き詰めて寝そべっていた。いつもつけている大きなイヤリングは外しているが白いローブは着たままだ。枕元にはたくさんのスキルカードを並べ、ブックにいれるべきものを吟味していたことを思わせた。

石のベットは最低ランクの家具のひとつだが、家具は街から持ち出せないはず。どうしても運びたい場合は馬車などの運搬系の道具が要る。それもまだ発明されていないし、出来ていたとしても野外では使えない。

「先天スキルですよ、先天スキル。《リビングキャッスル生ける城塞》っていうんです。まだありますけどクライさんもどうですか？」

アイテムボックスから取り出したカードを扇状に広げて見せた。全てが石のベッド。パーティひとつ分ある。

「いや、いい。しかし、どういうスキルなんだ？」

「見ての通りですよ。家具アイテムを持ち運べるんです。熟練度が低いうちは小さいものしか無理だし、持てる数も少ないですけど便利ですよ」

「ほう。なら、ベッドではなく調理台は持っているか？」

それがあれば街でしか使えない料理スキルが使える。料理の質も効果もそちらの方が断然高いものになる。クライは 簡易調理 以外の料理スキルも持っていた。 簡易調理 の方も上位スキルの 簡易調理？ になり、焼き物だけでなく鍋物も扱えるようになってる。

しかし、ミアがばつの悪い顔になった。

「残念ながら」

「そうか。そういうった特性のものならば真つ先に料理を思い浮かべると思ったが」

「ええ。まあ、えと、うん、高いですから。このベッドは生産職のレベル上げのためにたくさん造られたみたいですけど、使用する場面がないから安いんですよ。宿に行けばもっと高級なベッドがありますし、借家はもとからついてます。家を買う方はまだいませんがいたとしても石のベッドをわざわざ愛用するとは思えませんしね」  
「それはそうだろうな。まあ、簡単なものでいいから飯を作ってくれ」



ミアがずっと、上にかけていたマントに顔を隠した。

「いや、そこはクライさんが……」

「なんだ、料理系スキルがないのか？ 遠征では必須になるから早めに取っておいた方がいい。ないならば、俺のお下がりになるが  
簡易調理 のコモンスキルを譲ろう」

クライの仕事柄いつまで共に居られるかわからない。もし何かあればまたミアはひとりだ。

戦闘職ソロプレイヤーにとって食料は死活問題となる。生で食べられるものもあるが、多くは毒やダメージを受ける可能性を有する。簡易調理系スキルはそれほどキャパシティを必要としないし、持っていて損はない。

観念したようにミアが星々の輝く空を仰いだ。ここでは現実よりも星の光がよく届く。

「……できないんです」

「できない、とは料理のことか？」

「そうですよ。悪いですか？」

「悪くはないが料理のひとつくらいできた方がいいのは間違いないだろう」

「違います。呪いですよ。呪い！ この先天スキルを活かそうにも呪いのせいではどんな料理も消し炭とか毒薬になるんです。だから、この世界に限り料理ができないんです！」

呪いは恵みと表裏一体。利点の裏側に寄り添うように欠点が存在する。

クライは何故、彼女が顔を真赤にして反論しているのか理解できなかったが、気分を害しているのはわかった。

料理には母性的なイメージが強い。年頃にもなればそれに対する意識も芽生えるものかもしれない。特に現実でも同様のコンプレックスでもありようものなら。

「なんだ、それならそうとさえいい。呪いならば誰も責めはしない」

そう言ってさっさと鍋を火にかけると、ヨロイアヒルの肉を野菜と一緒に入れて煮込んだ。これを調味料で味を整えてポトフもどきの完成だ。スキルのレベルがいくら高くても手順と数量を間違えればおいしいものは作ることができない。

ミアも濃厚な鶏肉の匂いに惹かれてベットから這い出す。

「手際がいいですね」

「味もいいと思うが」

軽い金属製のカップにスープを注がれ、パンと一緒に手渡された。一口飲むと野菜の爽やかな味が口いっぱいに広がった。

「おいしいですね」

「だろう」

「もしかして現実でも料理できるんですか？」

「まあ、バイトでな」

クライは自身の行動、主にプレイヤースキルに疑問を持たれたときこう答えるようにしている。彼の数少ない経験ではこれで切り抜けられない場面はなかったと思いついてた。

「でも、こちらに来てからあんまり和食を食べてないんですよ。こっちの世界には醤油はないんですか？」

「醤油？　なんだそれは」

「冗談はいいですから答えて下さい」

「知らんものは知らん」

どうしても人間と A I C の間には埋めがたい常識の差があった。この世界に存在しないものの知識を彼らは持たない。辞書も入っているが国語辞典のみならず、百科事典もインストールしておくべきだっただろう。

見た目はともかく喋り方は天然の日本人の同様に創られたのだから、醤油を知らないのはおかしい。

「クライさんって外国の人だったんですか？」

「どうでもいいだろう、そんなこと。明日も早い。寝るぞ」

ある種の危機感を覚えた彼は無理矢理話を打ち切ると外套で体を包み、木にもたれた。

彼にとっては眠っていることは必要ない。ただふりをしているだけだ。ミアが寝付いてからも夜番を続けるだろうが、どうせ魔物は来ない場所である。

ミアは不服そうだったが、クライが目を閉じるのを見届けると仕方なくベットに戻っていった。

世界　の夜は今日も深く更けていく。

ゼロからトップスピードまでコンマ数秒で加速する。弾丸となっ

た黒鴉は高き空を蹴り、隕石のごとく落ちてきた。

クライが見上げたのと直撃は同時だった。受身を取る間もなく、固い岩肌が剥き出しになった地面を三度跳ね、地面の草を刈り取りながら転る。ミアはクライを追っていた目を飛んできた黒い物体に向けた。

「ここで会ったが百年目！ あのとときの恨みは忘れはせん！ 市中引き回しの上、さらし首にしてくれる！」

ゲームキャラクターのような、というかある意味それそのものなのだが、忍び装束をまとった女性が吠えた。

忍び装束とはいっても本物の忍者のようなものではない。半袖の上着に臙脂のホットパンツと黒のスパッツを今風にアレンジしてかつ、それとなく忍者っぽくしているだけだ。胸元に見える網状の鎖は帷子だろう。足にはその装備と体に似合わぬ金属の足甲をつけている。

それを着た彼女もまた戦国時代からやってきたようだ。丁寧に切り揃えられた長い髪をまげのようにまとめている。その体は野生動物を思わせる力強さと美しさを併せ持っている。

また面倒事に巻き込まれたと嘆息しながらミアが割って入る。

「ちょっと落ち着いて下さい。どなたですか？」

「なんだ？ 庇うのか」

「とりあえず訳は聞かないといけませんね」

「そうだな。俺も心当たりがない。なあ、三条三日月」

クライはゆらりと立ち上がった。

HPの減少はない。通常、プレイヤーへダメージを与えることは両者の合意がなければできない。待ち伏せや裏切りでの殺人は不可能というわけだ。

無差別にプレイヤーキルができるオンラインゲームは稀だろう。ストレスが大き過ぎる。そのため、専用のチャネルやワールドを用意してある場合が多い。ただし、このゲームではまだ実装されていない。

「クライさん、どういう知り合いですか？」

「チュートリアルのパールティ戦で仲間として一緒に戦った者のひとりだ。だが、それきりだったな」

ミカツキと呼ばれた女性が人差し指を突きつけた。

「忘れたとは言わせない。そのチュートリアルするとき、貴様が私にスキルを使うときはその名を叫べ、と言ったことを……！ そのせいで私は丸三日 踵落としや ウインドスラッシュ などと奇声を上げながら魔物を斬り合っていたのだ！ 貴様にわかるか？ あの、冷たい氷のような視線が！ 見ちゃいけません、と子供を連れて行く母親の背中を見送るしかなかった私の気持ちがい！」

(……でも三日も気づかなかつた、と)

能動型ギフトでなければ発声する必要も理由もないのはミアだっ  
て知っている。ゲームの中だから大目に見られるとは思ったが激しい戦いの最中では難しい。キャラクターに成りきつてのプレイ中なら  
らない人間はいないでもない。が、ログアウト不能の非常時にそんなことをしているのは少しばかり珍しかった。

「それは俺じゃない」

「いいえ、諸悪の根源は貴様だ。あのとき頷いていなければ私はあんな恥ずかしい目に遭うことはなかったんだ。そして、三日後にあの彼からのチャットで謝罪があるまで……私は、私はっ！」

(しかも言われるまで気づかなかったなんて！)

ミカツキの上段への飛び蹴りがクライを捉える。彼はそれを両の手で掴み、勢いを利用して逆方向へぶん投げた。

空中でくるりと影が舞い、金属の擦れる音を鳴らして地面に降り立つ。

「ブシドー になるかと思ったが シノビ を選んだか」

「私はもう正道の刀は捨てたのだ。手にするならば邪道の剣」

「どちらでも構わないが刀は背負わない方がいい。よく創作で背中に刀を背負った忍者が出てくるがあれはだいたいフィクションだ。斜めに掛けていては転がったときに体を痛める。音もうるさい。隠形には不向きだ」

キツとミカツキが目を細めた。

「これはもう決闘しかないようだな」

背から刀を抜く。細く短い直刀だ。

「ほう、やはり忍刀か。が、目立つところに着けているのは褒められないな。その衣装もそうだが、人目を忍ぶ者があからさまにそれだとわかるものを持っているのは自ら問者と言っているようなものだ。そんなもの本来 シノビ が扮するような商人や農民には必要ない。リアル志向なら苦無を使うのを薦める。あれはもともと多目的工具だ。一般人が持っているても何らおかしいものではない。ああ、

ただし投げな。よく小説や漫画で投げられるがあんな形のものがまっすぐ飛ぶわけがない。このゲームではスキルさえあればなんとかなるらしいがな」

もちろん全くこの 世界 では関係のないムダ知識である。 シノビ だけでなく シーフ だって本来の仕事はこなさない。ぶるぶるとミカヅキの体が震え、顔が林檎のように真っ赤になった。こめかみにはこれでもかと血管が浮き出ている。いわゆるムカツキマークというヤツだ。

「どこまで私を虚仮にすれば気が済むのだ！ 今は現実のことは関係ない！」

「そうか、それは失礼した。戦国時代が好きだと聞いたのでこだわりでもあるかと思って助言したまでだが、どうも余計なお世話だったようだな」

ミアの目からは火に油を注いでいるようにしか見えない。しかし、これでもクライは本気だった。

この数日ですっかり慣れてしまったミアにはそのことがわかったが、ミカヅキは馬鹿にされたとしか考えられなかった。

「とりあえず落ち着いて下さい、サンジヨウさん」

「そうだ。これから共に戦う仲間なのだからな」

冷静な低い声だった。ヴァレンチノが姿を現す。大きな白馬を二匹連れてくる。

クライたちカナンから二日と半日そこまで時間がかかっていた。そこまで長い時間がかかっているのは途中のダンジョンに潜っていたからなのだが、それを含めてもこの馬さえあれば二分の一ほどに

に短縮できた。

もちろん、本来はそのように乗り物を使ってモロクの城まで行く。ただし、馬では山岳地帯は厳しいので力の強いペットが最良だっただろう。

「どういうことですか、ヴァレンチノさん？」

「彼らが私の言った知り合いだよ。魔将モロクを倒す大事な戦友だ」

あご髭をこすり、クライの肩に手を置いた。

「魔将？ モロク？ もしかしてここに着たのはボスモンスターの討伐ですか？」

ミアが首をかしげた。

「言っていないかったのか、クライ」

「私は、行くぞ、としか言われてませんよ。行き先は聞いていなかったのだからの狩場の移動かと」

「そういえばそうだったな」

「おいおい、ボスとの戦いとなれば死者が出るかもしれないのだ。そう簡単にことを進めてくれるな」

ボス、それも 魔将 の一柱であるモロクともなればその強さは他の魔物の比ではない。

かつては神にも数えられた牛頭の魔将は全魔物中でも最強の攻撃力比率を誇る。もしプレイヤーと同レベルのモロクがいたとすれば筋力値に極振りでも攻撃力はその百五十%を有に超えるだろう。

「いえ、そろそろ強敵と戦ってみたいと思っていましたので」



ミアは臆しない。というよりも、投げ槍だ。

所詮ゲームだとしか考えていないから、現実でも仮想でも生に対する執着心が希薄過ぎるから彼女はいがに入った栗みたいな人間としてロールプレイできる。

「それよりも、です。私はその男が参加するなんて聞いていませんよ！」

ミカツキは大袈裟に腕を広げた。

「クライを知っているということはその実力も知っているはずだ。クライよりいい ウォリアー を知っているか？」

言葉に詰まる。

もともと彼女の交友範囲は狭い。それを抜きにしてもクライより優れたプレイヤースキルを持つ ウォリアー はまだ育っていない。レベルを考慮しても全く情報を持たずに始めなければならなかった他のプレイヤーたちからは頭ひとつ抜きん出ている。

「知りませんが……」

「ここから先はチーム戦だ。よろしく頼む」

クライが差し出した手を彼女は湿った目で見下ろす。

「この人はいつもこんな感じですか。ちょっと何考えてるかわかりにくいですが、悪い人ではないですよ」

「貴方も大変だな……。仕方ない、この娘に免じてここは目を瞑ろう」

ミカツキはしぶしぶその手を握った。

歩くとき、がちがちと足甲の金具がなった。忍者ってこんな  
だったかな、とミアもクライと同じような感想を抱いた。

それは城、というよりも幾つもの巨大な岩の塊と呼ぶに相応しいものだった。

辺りの草は伸び放題となっていて採集に来たならば喜ぶべきところだが、腰まであるそれらはあらゆるものの進行を阻害していた。反り立つ斜面には植物のツタが張り巡らされている。

空には真つ黒な鳥が円を描いている。曇っているわけでもないのに暗く、不気味な光景だ。

城自体の断面積が上に行くほど大きい。丸い窓には統一性がなく、無秩序に間隔を開いていた。

およそ人の手で再現しうるものではない。建築に学のある者ならばこの城がどうして立っていられるのか不思議に思うだろう。その答えはひどく単純で、『ゲームだから』のひとことで済む。

「これが？」

「ああ、らしいな」

ミアの問いにクライが頷いた。

入り口は、と視線を巡らせれば、稚拙な堀に橋が架かっている。ちょうどその上にはふたつの人影があった。片方は弓を、もう片方は円形の盾を背負っている。両方が A I C である。

「彼らがこの城の発見者だ。見て分かる通り ナイト と アーチヤー だ」

ヴァレンチノが呼びかけるとふたりがこちらを向いた。双方、痩せ型の男性だ。

彼らはまだ中には入っておらず、ご丁寧なことにダンジョン前に設置されている看板からモロク城だと判明したと言った。つまり、丸三日ほどこの近くで狩りと採集をしていたということだ。アーチャー はアイテムを多く持ち運べる先天スキルを持っていたためにまだアイテムボックスには余裕があるらしい。

自己紹介もそこにパーティを組むと、早速城へと突入した。中も外観と変わらない。天然の洞窟に少し手を加えたようだ。壁も足場も無骨な石塊で出来ている。

「来ましたよ」

珍しい来客の歓迎とばかりに三匹の化物が現れた。浅黒い肌はどこもかしこも重く固い筋肉が盛り上がっている。頭には二本の角があった。手には巨大な斧が握られている。

牛頭にひとの体を持つ魔物だった。

「ミノタウロスですね。初めて見ました」

「割りとポピュラーなモンスターだと思っが？」

「《Genesis World》では、ですよ。それではさくつと行きましょう。デューオー！」

ミアがカードを掲げると、黒い六芒星から二尾を持つ猫が出現する。真っ白な毛がぞわり、と逆だった。

「かわいい……だっ！」

突如現れた保護欲をくすぐる乱入者に戦闘態勢に入ったはずのミカヅキの表情が緩んだ。

そこへ横から戦斧が強襲する。

「危ない！」

ミアが言い終わるより先にミカヅキの体は宙を舞っていた。まためた黒髪が命を得たかのようににはためく。

空中を蹴る。

二段ジャンプ はゲームの世界ではポピュラーなことだが、実際にすると異常さが際立つ。ジャンプ の上位スキルであり、もともと俊敏さに優れた シノビ のクラススキルであるそれは使用者の機動力や回避力を格段に引き上げる。

このスキルがもたらす自由度はプレイヤースキルによって大きな格差を与えるものだった。防御でもダメージは受ける、が、そもそも当たらなければ全くの無傷。水を得た魚に攻撃を当てることは至難の業だ。

魔人の頭上を超えた彼女はどこからか取り出した十字手裏剣を投げた。吸い込まれるように魔物の首筋を切り裂いた。

その痛みに振り向いたのが運の尽きだった。

魔物の腹へと鈍重な両手鎚が突き刺さる。衝撃が六つに割れた腹筋をより細かく砕いた。降り立ったミカヅキの頭上を巨大な肉塊が越えていった。

ヴァレンチノはすでに他の二体に向き直っている。

そちらも片方は上腕を白猫に噛み付かれ、矢が剣山のように刺さっている。残る一体は ナイト が当たっている。

「俺の出番はなさそうだな」

クライはぼやきながらも拳を握り、ミアを守るように立っていた。彼はミアを含む後衛が襲われない限り動かないだろう。

ミカツキが忍刀を抜いた。彼女が宙を跳ぶたび、魔物のHPは減少していく。大振りな斧の攻撃は彼女の影すら捕らえることはできなかった。

当たる直前でもう一度二段ジャンプを使うくらい造作もない人間離れた動体視力や反射神経、判断力があるからこそできることだった。

センスのひとことで片付けることはできない。確かに才能はあるが、一切無駄の削ぎ落とされたそれはただ単純な反復練習、経験により体に染み込む。

武道の基本はどんな物理法則であっても変わらない。

大事なのは経験を積み、技を自分のものにする。型に沿った習慣は反射的に行動を促し、迅速な行動は余裕を産む。余裕はその後の選択肢を広げる。広がった選択肢から選ばれた最善の答え、すなわちここでまた極めた型へと戻る。それは常に色よい結果を出し続ける。

ゲームが始まって以来、彼女は現実世界と同じように起床後の鍛錬を一日たちとも欠かしたことはなかった。常に新しい体を苛め続け、動きの限界へと挑んできた。その結果、彼女は転職してからというもののHPが半分を下回ったことはない。

遂には刀による多段攻撃スキルによって魔物は光と化す。

その反対側では対照的に重い鉄塊同士のぶつかり合う力と力の戦いだった。牛人の振り下ろした斧の側面を鉄槌が打つ。痺れるような重さが双方の腕を震わせた。打ち合わせる行為だけでヴァレンチノと魔物のHPを容赦なく削る。

互角の戦いも彼がスキルを発動するまでだった。鎚の一撃を防ぐと斧を構えた牛人にヴァレンチノはガードブレイクを見舞った。受け止めた斧を突き抜け、浸透した圧力が胸筋を抉る。

たたらを踏む魔物に横合いから一条の軌跡を描いて矢が突き刺さった。ミアのクロスボウだ。

ヴァレンチノも追撃とばかりに強烈なスキルを叩き込んだ。大振りな横殴りの一撃。隙がなければ使えない技だが、その分威力は生半可なものではない。

魔物は奥の通路へと吹き飛んだ。ネコマタによって倒された一体を含めてこれで戦闘は終了、のはずだった。

戦闘終了を合図に出しかけたくらいの右足を浮かせたまま止まる。

「何か音がしないか？」

注意深く辺りを観察していた彼の言葉に一同が周りを見渡す。ごご、と確かに何か動く音がした。そのくせ、見える範囲には何の変化もない。

「上だ」

ミカツキ言った。

過剰な土の匂いが臭覚を刺激した。彼らの頭上で通路を覆い尽く

すほど大きな岩がゆっくりと落下を始めている。ぱらぱらと砂が落ちる。

「これは……罨ですね。入り口を封鎖する類でしょうか」

「ともかく進もう。ここには押しつぶされる」

クライたち AIC ははじめて 世界 の言葉の意味を理解した。このトラップは 彼ら の知るものではない。ならば、以前の更新 によって創られたものに違いなかった。挨拶のつもりなのだろうか。

一行は魔物よりも強大な脅威へと立ち向かわなければならなかった。

坂の上にある丸い岩がだんだんと大きくなっていくのが見えた。

ごろごろと音も近づいてきている。まさか、ミアたちもこんなチープ臭い罨が仕掛けられているとは露ほども思わなかった。

穴があつたら入りたいところだが、道は一本道で隠られるような隙間もない。

「あー、あれに当たったらどれくらいのダメージなんでしょうね」

「俺で半分といったところか」

クライは無表情だ。

防御力に優れた ウォリアー でそれなのだから、ミアに直撃すれば死神との二度目の邂逅が待っている。ただし、今度は戻ってこ



られない。

「ヴァレンチノさん、ヴァレンチノさん」

「ふむ、何かな？」

「そのハンマーで砕けたりしませんか？」

金髪の男はあっさり首を横に振った。

「武器が安易に壊れないようにあれも耐久力が設定されたアイテムだ。それに石と鉄との差はあれど物量の差は覆せん。先に体が押し潰される」

つまりはフィールドマップの置物とは違い、あれも所持できる物品だ。罾のシステムごと家具アイテムに設定されているかもしれない。どちらにする所有者はこの城の主であるモロクに設定されている。

もつ岩は目の前に迫ってきていた。

「とりあえず、逃げるとしますか」

足の遅いミアをミカツキが抱え、跳躍する。他の重装備の面々も続いて駆け出した。城内だというのに足元が凸凹しているせいで走りにくい。

ここに至るまで多くの魔物と遭遇した。多少の苦戦はしたものの、危機感を抱くほどのものではなかった。

それより厄介なのが忘れた頃にやって来る陰湿な罾の数々だ。

槍が降ってきたり、魔物に挟撃されるくらいは当たり前。毒の沼にはまったときは流石のクライも死を覚悟した。ヴァレンチノの浄

化スキルによって事無きを得たものの一層身を引き締めることになつたのは言うまでもない。

「なんで シーフ も誘わなかつたんですか!？」

シーフ のクラススキルには罠の探知や索敵、隠し通路の発見などダンジョン探索に役立つスキルが満載だ。逆にいえば、シーフ なしに高位のダンジョンへと潜るのは自殺に等しい。

「罠があるとは思わなかつたのだ」

「ミカツキさんも シノビ なんですから、 罠の知識 くらい持つていて下さい!」

「小賢しい! 私ひとりならばどんな困難もこの身ひとつで乗り越えてみせる」

「あーもうそういう場合じゃないでしょう。ダンジョンに入るときくらいそういう柔軟性を持つて下さい!」

今更言っても仕方ないことだが、ぼやかずにはいられなかつた。

ミカツキが二段目のジャンプを終えて着地しようとした瞬間、ぱかっ、と気の抜けた音が耳に届いた。

東の間の浮遊感。そして、落下。

意味を成さない音がミアの口から漏れた。

体の硬化とは反対に頭の熱はすつと引いていく。

(大岩に気を取られているところに足元へのトラップ。これを考えた方はさぞ性格が悪い)

この 世界 に来てからの思い出が走馬灯のようによぎる。

最初のパーティ、クライ、エルダートレント、デュオ、エネア。いい思い出ばかりではないが、彼女はまだ絶望する気にはなれなかった。

ミカツキが彼女を抱きしめ、その熱が伝わる。暗がりの中に薄っすらと地面が見えた。

「ミカツキさん！ 上手く落ちてくださいね！」

この高さから落ちれば潰れたトマトになるのは想像に難くない。ゲームとはいえその設定はきちんとしていて、ジャンプ系統のスキルを持たないプレイヤーなら十メートルの高さから落ちればダメージを受ける。持っただけの時間落下しているのだから相当な高さだ。

これには属性が存在せず、単純な防御力以外では軽減することはできない。このままではふたりとも速度とぶつかる物体の硬度、重量から導きだされたダメージを負うことになるだろう。これは物理演算ダメージと呼ばれるものだ。

先ほどの大岩のダメージ計算も同じように行われる。したがって彼女たちは地面への到達と同時に避難しなければ上から降ってくるであろう大岩からも被害を受ける。

ミアが地面へと手のひらを向けた。そこから湧き出るシャボン玉のような泡が滝を創り出す。

それは地面に衝突しても割れる様子はなかった。彼女たちの真下を泡の絨毯が覆った。

ミカツキは小さな体を抱え、身を丸くして泡の上を跳ね転がった。もうひとつ黒い影が同じような動きで転がり、その真上から巨大な

岩がぶちんと泡を潰した。

「危機一髪、でしたね」

HPは減っているが致死量ではない。

「今のスキルは？」

「バブル です。正直あまり役に立たないと思っていましたが入れておくものですね」

そのスキルは熟練度があがることに割れにくくなり、体を支えることができるほどになっていた。泡風呂で遊んでいた成果だった。

「ですが、もうMPはすっからかんですよ。召喚獣も回復アイテムがなくては出せません」

「いや、良い判断だ」

最後に落ちてきたひとり、クライが言った。

身を起こし、上に残った三人にコールを飛ばした。ひとまず皆無事だった。

「これからどうする？」

「上で合流しよう。ここがダンジョンであるならば上への抜け道があるのは間違いない。出られないことはないはずだ」

クライはこのマップを覚えていなかった。もしかすると 更新の影響で変化があるかもしれないが、ひとまずは彼に従うべきだろう。

ミアはランタンを取り出し、火を灯した。

石畳の地面が広がっている。鉄の檻や崩れた石壁はかつては文明があつたことを思わせる。上に比べれば丁寧な造りだが逆に寒気がした。

「アンデッドでもそんな空気ですね」

「火系のスキルはないから厄介だな」

「そういえばちょうど火属性の方だけいませんね」

ミカツキは風に加護を受けているから、ここにいるのは火以外の四元素の属性が揃っていることになる。

「最悪、先天スキルを使う。モロクとの戦いまで取っておきたかったが、三人ではどこまで戦えるかわからない」

私とこのふたりですしね、とは思っても口には出さない。ただでさえ連携に不安があるというのに悪化させては勝てる戦いも勝てない。

(うーん、やっぱり皆、ソロプレイヤー独り身だったから？ 逆かな。類は友を呼ぶ？ ともかく、これだけ面倒な人たちが揃うのも珍しい)

ミアの悩みの種はまだ尽きそうにない。

ランタンの灯りに魔物が映しだされた。

クライは槍を具現化する。

黒鉄の刃は先端になるにつれて細くなっているが、根元の太さからしてかなりの重量があるだろう。その両横には武器を抑え、引っ掛けるための爪。

突きと斬撃の両方を可能にしながらもフォームは洗練された美しさを保っている。このパルチザンと呼ばれる槍の最大の利点は使いやすさだ。シンプルな形は使い手を裏切らない。彼ならば手足のごとくこれを扱うだろう。

巨大な骨の化け物が腕を薙いだ。

人骨のようにも見えるが本当に生前人だったなら象より大きいことになる。ならば、生きていても化け物であるに違いない。

クライが腕を避け、魔人の死角へと回り込んだ。

そこへ飛来するひとつの影。同じ所へやってきたミカヅキが勢いを殺せず、クライを巻き込んで石壁に衝突した。

「何故私の跳んだ場所にいるんだ！」

「ここが安全だからに決まっているだろう。ミカヅキが後からやってきたんだが」

「私は最前線で戦っていたんだ！ そちらが動きを見ておくのが筋だ！」

ふたりの頭上に骨の手が現れる。クライは上に乗っていたミカヅ

キを投げると地面を転がった。

「余所見をするな」

「気づいている!」

「いい加減喧嘩はよして下さいよ」

ミアがクロスボウに込め、矢を放つ。ひゅん、と空を切って跳ぶ。あろうことか矢は骨の隙間を抜けていった。

「……えっ? ありですか?」

矢は点の攻撃。体積の少ないこの魔物への有効範囲は狭い。胴体に当てるつもりなら背骨や頭を狙うのがいいだろう。しかし、この視界の悪さとミアの弓術では確実性に乏しい。

「頭だ!」

その言葉にミアが頷いた。クロスボウのハンドルを再び回す。ミカツキが空中から骸骨の二の腕を蹴り飛ばした。腕の骨ががしやがしやと音を立てて、散らばった。だというのに、与えられたダメージは小さい。それらの骨はすぐひとりでに持ち上がり、再び腕を形作る。

「どうやら砕くように攻撃した方がよさそうだな。ばらばらにしても再生能力があるらしい」

「見ればわかる!」

忍び装束が高くへと跳躍する。

「行くぞ! 踵落とし!」

先程、スキルを叫ばされたことについて憤っていたにもかかわらず、また同じ事を繰り返していた。完全に癖になってしまっている。宙で満月のように綺麗な弧を描く彼女の足甲を骸骨の魔人が両腕を十字にして受け止めた。当然、その腕は関節をはずれて飛んでいく。

しかし、そこには槍を構えたクライがいた。後ろに下がって骨を避ける。

ミアがまたしても矢を射出する。今度は額に当たる。ガコンと音がしてしゃれこうべが石畳を跳ねた。HPバーはちゃんと減少している。頭が本体だ。

「どうやら、腕を喪失している間に攻撃するといよいよですね。ここは連続攻撃といきましょう」

クライは同意を示し、浮遊しようとするしゃれこうべに斬撃を加えた。それは空中にいたミカツキのもとへと吹っ飛ぶ。

「私は左利きだ！ 右に飛ばすな！」

彼女の籠手は左手と右手で性質が違う。主に攻撃に使う火力型の左の籠手に対して右手は防御力が重視されている。

それでも体をひねって左手の掌底を当てる。ミアからしてみれば到底真似できる動きではない。

壁にぶつかったのか、石と骨の音が二重に奏でる。

「スタミナが切れた」

顎の先を汗が滴っている。それはスタミナ値の限界を示す。



ミカツキが苦々しく額を拭う。

二段ジャンプ の影響だった。彼女の常識はずれな動きは常にスタミナ値を消費する。MPと違い、回復は早いがそれでもずつとアクロバットをこなしてはこうなることは時間の問題だった。

(度重なる戦闘と罨。もう少し気をつけるべきか。もう少しお互いに気を使って貰えればなんとかかなりそうなものだけど)

敵のHPは約半分。できるなら回復アイテムは使いたくないが、クライも多少のダメージを受けている。ミアだってまだMPは空だ。

ぷつん、と何かがきれた感触がした。パーティ画面を確認したミアが声を上げる。

パーティメンバーの一覧からヴァレンチノが消えていた。死の解放のメールから死んだパーティメンバーがどのような扱いになるのかは誰にもわからない。ミアは最悪の場合を幻視してしまう。

「クライさん！ ヴァレンチノさんが！」

「わかっている。それより今はこいつだ」

元の形に戻った骸骨が見当はずれなところで腕を振りかぶる。

「ミア！ こっちだ！」

何がなんだかわからないままクロスボウを抱えた彼女はクライに引っ張られてその背に隠れた。

体から外れた骨が弾丸のようにふたりを襲う。その幾つかを槍ではじくが、圧倒的な質量がクライを打ちのめした。

「まずいな」

敵は攻防に優れ、こちらの戦力は半分。スタミナ、MPは空っぽ。ミカツキも足さばきだけで距離を詰めるがリーチの差があり過ぎる。忍刀ではるくに攻撃が届いていない。投げた忍具もスキルなしではあまり威力を出せていないようだ。

「仕方ない……か」

クライが槍を構えた。

彼の先天スキルさえ使えば、これくらいの敵はひとりでも倒せるかもしれない。しかし、その技が使えるのは一日に一度きり。この後には魔将との戦いが控えている。そちらがどれだけ困難なものになるかは想像がつくだろう。

が、声はなかった。

発声より先に爆発音が鼓膜に突き刺さった。

天井を突き破って現れた何物かは岩石を撒き散らす。煙の中に見える獣のシルエットが吠えた。

それは眩いばかりの金色の狼。いや、狼男だ。

赤光の瞳、鋭い犬歯。あらゆるものを切り裂くであろう両の手の爪。しかし、そこには見覚えのある大槌が握られている。

「トランス？ ……《一匹狼》ロソリーウルフ。ヴァレンチノか！」

先天スキルには三種類のものがあった。ミアのように条件を満たせば自動的に発動する自動発動型。クライのようにスキル名を唱え、スタミナ値やMPと引き換えに発動する能動発動型。最後は自らの

身体の一部または全身を全くの別種に変えてしまう融合変身型。

ヴァレンチノのそれは人狼ウエアウルフの上位種。一匹狼ロンリーウルフのものだ。

強靱な肉体に変貌することにより大きな能力ボーナスを得ることができる。ただし、一匹狼はそのあの通り群れをなさない。故に彼は先天スキルを使うためにパーティを抜ける必要があった。

片手で振るわれた大槌がだるま落としのように骨の体を吹き飛ばした。更に光の魔法が逆の手に魔方陣を描いて発動する。白木の杭がしゃれこうべを貫き、地面へと縫いつけた。

体を形成していた骨が人狼へと襲いかかる。が、鎚を振るうと白銀の粉が舞い、骨は弾かれたように地面へと跳ね返った。

「ゴオオオオツ！」

散らばった骨を鎚が踏み潰す。砕けたそれはもう二度と再生しない。

ファイナレに白木の杭に貫かれたままの頭に鉄槌を与えた。骨の魔人はあまりにも呆気無く人狼の技に砕け散った。

クライの先天スキルの目的が弱点をなくすことならば、ヴァレンチノは弱点はより大きくなって全ても力を超えられるほど力を求めた。望みどおり獣化した彼はパーティを組む必要もないくらいの破壊力と魔物特有の自動回復能力を有している。

ただし、その能力は一日につき一定時間しか発動することはできない。

彼にはどうやってもここまで鮮やかに屠ることはできない。性質、属性に違いがあるものだとはわかっている結果として見せられたのならまた別の話だ。

感情の演算を司る回路でひとつの火が灯る。それは常に競いあう人間なら誰しもが持つ劣等感に近い。

他の何者かに数値上で劣れば、敵対したときに危険度が上がる。たとえ仲間のヴァレンチノであれ、可能性を意識させるには十分だった。むしろ近い分だけ気になる。

それはクライが人であれば、の話であればだ。全ては水面下の出来事であり、表情には出ない。

「皆無事か？」

心なしかヴァレンチノの声が低くなっている。先天スキルのせいだ。

「ああ、なんとかな」

「下に降りる道を見つけたんだが、もっと下層だったようだな。ちようど真上に来たので突き破ってきた。間に合ってよかったよ」

「もしかして、もう玉座は近いか？」

「の、ようだな」

プリーストのクラススキルで回復し、先を目指す。

すぐに階段が見つかり、残るふたりとも合流できた。さっきの骨の魔人は階段を守る中ボスだったようだ。

一同は開けた場所へとたどり着いた。広い以外は他と変わらず、中央にある冠を被った巨大な牡牛の魔物の青銅像だけが存在感を示

す。ふんぞり返って仁王立ちしていた。

罨の存在に注意しながら進むと扉があった。ちょうど入ってきた方と反対の壁にあるそれは押ししても引いてもびくともしない。鍵を差し込む穴すらない。

クライヤヴァレンチノの知るモロクの城にはもちろんこんなギミツクはなかった。

「鍵穴もないということは魔法でしょうか？ 何かこちらに来るまでにそのようなアイテムはありませんでしたか？」

「知らんな」

ミアは周りを注意深く見渡し、青銅像をぺたぺたと触った。冷たい。腹には不自然なくぼみがいくつかあり、手を引つ掛けることができるようになっていた。

「何か書いていますね。それに、これは引き出しでしょうか」

胸のところには赤く文字が彫られている。

村人の中にひとり贄を偽りし者あり

その者は語ることもまた偽りなり

最初に小麦を納めた農民は言う

四足で歩くものを納めし者の中に偽りし者あり

ふたつ目に雉鳩を納めた狩人は言う  
私の前後に納められしものに偽りなし

みつつ目に牡羊を納めた羊飼いは言う  
納められた二匹の牛に偽りなし

よつつ目に牡山羊を納めた商人は言う  
私より後に納められしものうちに偽りあり

いつつ目に子牛を納めた機織りは言う  
商人と村長は正しきものを納めた

むつつ目に牡牛を納めた村長は言う  
私は確かに正しきものを納めた

最後に幼子を納めた母親は言う  
家畜の中に偽られしものあり

鍵は偽りの贅なり  
汝、扉に掲げよ  
誤りを示せば扉は開かれる  
違えば汝が贅となるであろう

くぼみに手を差し込んで引く。やはり引き出した。  
くぼみは七つ、よって引き出しも七つだ。それぞれの中には動物  
や赤ん坊のミニチュアが入っていた。どれも青銅で作られている。

「これはおそらく謎解きの類ですね。オフラインならともかくオンラインのRPGでは見たことがありません」

何故ならば一度答えがわかればそれが出まわり、チャットや攻略サイトなどですぐに回答を得ることが出来るからだ。それに加えプレイヤー層が合わない。こういった謎解きが好きならもっと別のゲームがある。混ぜる必要性は、ない。

ならば、何故ここにこんなものがあるのか。

「正解すればモロクへの扉は開かれますが、間違えれば何らかのペナルティを課せられるようです。できれば一発で当てたいですね」

ミアの言葉にクライたちは頭を抱える。

（俺たち に解けないということがバレているということだな。こういう問題は柔軟な思考を求められる上に総当りでは駄目だ）  
トリアルアンドエラー

A I C である限り、この問いは解けない。彼ら だけここに来ていたならば引き返さねばならなかっただろう。たった七回の試行とはいえ無策で挑むには 彼ら の数は多くない。

それでも人間がわからなければ終わりだ。彼も彼なりに意見を出してみる。

「このうちのひとつが鍵となるわけか？」

「でしょうかね。……得意な人がいればいいのですが」

誰も声を発さなかった。ミアも期待していたわけではないが、少し気持ちが沈む。クライやミカヅキはともかくヴァレンチノなら少しはできるかと思ったのだがそうもいかないようだ。

「とりあえず、掲げてみればいいのではないか。とりあえずひとつ目から」

ミカツキが小麦の穂のミニチュアを手にする。その手をクライが掴んだ。

「『違いは贅となる』と書いているだろう。間違えばどうなるかわからない」

「クライさんの言う通りです。ここはひとまず考えて、無理そうならばそうしましょう」

「なら、何か案はあるのか？」

と、ミカツキが不服そうに言った。

「案なんてありませんよ。正攻法で解いていくしかありません。こういうのは割りと簡単に答えが固められますよ。まず狩人の言葉です。『私の前後に納められしものに偽りなし』ということとは彼の言うことが間違っていた場合、嘘を言っているのはひとり、ということに矛盾します」

小麦、雉鳩、牡羊の入った引き出しを閉めた。

「ならば農民と羊飼いの言うことは真実だということだな」  
「その通りです。これにより牛二匹と幼子が除外できます」

これまたあっさりと三つの引き出しが閉まる。牡山羊のミニチュアが残った。

「意外と簡単だったな」



クライが手を伸ばそうするのをミアが遮った。

「いえ、それが子牛を納めた機織りが否定しているんですよ。商人と村長は正しきものを納めた」。これでは全てが矛盾してしまいます」

ひとつひとつ確かめながら減らしていったはずなのに最終的にはひとつの答えも残らなかった。ミアの脳裏に何かが引っかかる。

五分ほど考えるとはっとなって閉まった引き出しのひとつを開けた。

「これです」

ミアは赤ん坊のミニチュアを手にするのにやりと笑った。

「牡山羊ではなく幼子か？」

「ええ。これが『四足で歩くもの』なんです。まだこのくらいの年の子はハイハイしかできません。多分、元ネタと思われるスフィンクスへのオマージュなのでしょう。そして、母の言う『家畜の中に偽られしものあり』は彼女が嘘を吐いていたとしても何の矛盾も生じません」

答えに誰も不満は示さなかった。他の誰もがわからないのだから、乗る価値はある。

「それでは皆さんの命はお預かりします」

かつかつ、と扉まで歩き、ゆっくりと息を吐く。失敗した時のことを考えないようにしているはずなのに嫌な汗が流れる。

ミアが青銅を頭の上まで持ち上げると扉は左右に割れ、玉座の間が現れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8801y/>

---

Ampere Blood

2011年12月31日21時47分発行